

---

# ジェシータの楯

悠理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジエシータの楯

### 【NZコード】

NZ8586NZ

### 【作者名】

悠理

### 【あらすじ】

東京。一般の人間にはその存在が知れ渡っていない、政府の関係者や大財閥の人間しか知る事のない特殊SP機関『ジエシータ』。少年は世界最高峰の護衛機関に身を置く、史上最年少のメンバーの一人だった。

だがある日、少年は奇妙な出来事に遭遇し、『魔術』という新たな世界の法則に触れていく。

その先に見えるものは何か。少年はただ一つの楯としてそこに立つ。

## プロローグ（前書き）

こんには、悠理です。

こちらの作品は以前公開していた『魔術記』という作品のリメイク作です。

設定の大変更がかなりありますが、前作から呼んでいただいている方はご容赦ください。

初めての方は今後ともよろしくお願ひいたします。

## プロローグ

東京都港区芝公園。

1958年10月14日竣工、同年12月23日に完工式が開かれた東京の観光名所の一つとして知られる、東京タワー。正式名称は日本電波塔。

7月中旬、すでに真夏の猛暑に突入している蝉の「るる」と今日この頃。

東京タワーの傍らにて正式な会場が設けられ、今そこは一つの応援演説会場と化していた。

政治家、斎藤史孝<sup>さいとうふみたか</sup>は約300人の支持者の前で小さなステージ上に立ち、マイク片手に現在の日本について、そして政治社会の現状について熱く語っている。大衆に向かつて鼓舞、激昂できるその姿はさすがと言うべきか。支持率が高いだけの事はある、政治に興味のない自分でも思わず彼の話に耳を傾けてしまつほどであった。

『ねえ、結城。結城つてば！ 人の話を聞いてる！？』

……これは決して、斎藤氏の台詞ではない。

片耳に引っ掛けているイヤホンから女の子の叫び声が響いて、黒髪黒目、中肉中背の少年、諷訪部結城<sup>すわべゆうき</sup>の意識はようやく現実に引き戻された。

演説の上手い政治家というのはちょっと困らせられるな、と結城は半分呆ながら考える。大して興味のない話だつてのに、聞いてるだけで妙に引き込まれるというか、中毒性があるというか。いや

まあ、政治に興味がないのは確かだ。そんな無関係者の自分まで話の中に引き込むほど、あの斎藤史孝という中年太りのおっさんはよほど話が上手いのだらう。

『ちよつと結城ー。』

「ああ、『じめん。聞いてる聞いてる。……で、なんだつけ?』

『絶対に聞いてなかつたでしょ……』

イヤホンの向こうで相手の女の子が溜息を吐いたのが何となく分かる。そんな面倒くさそうにされてもね。文句なら演説中の斎藤氏宛によるしくお願ひします。

『……まあいいや。もう一度説明するから今度はちやんと聞いててね』

「りょーかい」

通信相手の催促にま温い声で返す。

結城の軽い返事を聞いて相手の女の子は小さく咳払いをすると、

『今からスピーチが終盤に差し掛かって……せいぜい2分後ぐらいかな。この後は拍手会だから、ステージ周りにいるバリケード要員の警察がその場から離れることになつてゐる。その時、ほんの数十秒ぐらいだけ斎藤氏の周りが完全にノーガードになるの』

「……えーっと、つまり?」

『鈍いなあ。だからね? もし犯人が斎藤氏の事を狙つてくるのな

ら、その数十秒が絶好のタイミングってこと』

「……ふむ」

大体の言いたい事を把握し、誰に向けてでもなくその場で頷く。結城のその反応を知つてか知らずしてか、少女は軽く息を吸つて続けた。

『犯人の使うものが、ナイフか、拳銃か、それとも別の何かかは特定できないけど……おそらく今犯人のいる場所は結城から見て右手。一番人だかりが多くて込みあつてる場所だと思つ』

少女の言葉に視線だけを右に向ける。

言われて気付くが、確かに。演説中の斎藤氏との距離が一番近い事もあつてか、支持者たちの密集度がもっとも高い。自分の身を隠すのであればあの中に紛れる事がおそらく最良であろう。

『目視でも十分に分かるでしょ？ 結城のいる位置からだと飛び出すのに少し時間がかかるけど、大丈夫？』

「無理、とは答えられないだろう？ これでも一応仕事な訳だし」

イヤホンから届く声に小さく返しつつ、結城は移動を開始する。人の合間合間を縫うように移動して、上手い事人だかりの最前列に体をすべり込ませる。前に飛び出す際、少しでも早く飛びこめるよう位置取りをしておかなければならない。

バリケード要員の警察と軽く目があつた。少し不審な視線を向けてくるが、結城の顔を見た途端に慌てて小さく一礼する。こういうのはあまり慣れてないんだけど……とりあえず結城も、首だけで礼を返す。

「綾羽。残り何秒？」

『ん。せいぜい三十……いや、最後にシメがあるだろ？から45秒ぐらいかな』

残りあと数十秒。ほーっとしてればあつという間な時間である。

「……そろそろ、か。悪い、集中するから通信切るよ」

『え？ ちょっと』

相手の返答を待たず、結城はイヤホンのコードの先 ポケットから一見ただの音楽プレイヤーにしか見えない端末を取り出し、軽く操作してイヤホンごとポケットに突っ込み直す。通信をこつちから一方的に切断するのはいつもの事だ、特に向こうの『機嫌を損なう事はないだろう。

それからすぐ、斎藤氏が演説のシメらしき言葉を口にして、周囲の人達から次々と拍手が湧き上がった。斎藤氏自身も頭を何度も下げて、支持者たちの拍手に行動で返す。とりあえず周辺に溶け込まなきやならない結城も拍手だけしておいた。

やがて司会の人らしき男性が前に出てきてマイクを手に持つと、

『それでは今から斎藤史孝の拍手会を行います。皆様は是非ともステージ上へどうぞ！』

その言葉を同時に、バリケード要員の警察達がステージ脇へと引っ込み始める。

……そもそも問題の拍手会だ。未だ誰も前へ踏み出さうとしないが、警察の方が完全に身を退いたら一斉にゾロゾロと歩み寄り始め

るだろ？ 一体どのタイミングで犯行を行うつもりなのか、こればかりは自分自身の眼力に頼るしかない。

だが。

「……あ？」

だが、予想以上に。

予想以上に、それは早く訪れた。

結城が視線を向ける先 ステージ右手の人ばかりの中。未だ積極的に動こうとしていない人々の中を、ただ一人、両手をポケットに突っ込んで前進している男が視界の隅に映った。

(……まさか)

男は一気に最前列まで躍り出ると、死んだ魚のような目でステージ上に立つ斎藤氏を睨みつけている。ただチラ見する程度では分からぬだろ？ 男の顔を凝視していた結城は、男の向けるその視線に明らかな殺意が混じっている事を見逃さなかつた。

結城の中で思考に入れ替わる。

スイッチを切り替える。

「 ッ！」

瞬間、その場で地面を思いつき蹴り上げ、勢いよくその場から走り出す。

向かう先は男の元。だが一瞬判断が遅れたせいか、距離がやたらと遠く感じる。

男は上着のポケットに突っ込んでいた手を外に出し、その手中にあるもの おそらく『手榴弾』を取り出した。

(ンなものビニで手に入れたんだよ……！）

頭の中で毒づきつつも、一気に駆け抜ける。もし手榴弾なんかがこんな街中で爆発したらだじゃ済まない。それを人に投げつけるつもりなのだ、斎藤氏みたいな中年のおっさん程度一撃で殺せてしまうレベルである。

男の手榴弾を持つ腕が振りかぶられる。周辺にいる数人の人々が彼の不審な動きに視線を向けているようだが、ただの一般人である彼らに何か期待しても無駄なことだ。

だからこそ、結城がここにいるのである。

「させらかあ！？」

腹の底から声を張り上げ、間一髪、結城は男の体を掛けて全体重のタックルをお見舞いする。かはつ、と男が胃の中の空気を吐き出したのが分かる。

そのまま両腕の手首を拘束すると、完璧に動きを封じてコンクリートの地面へと容赦なく押し倒した。同時に、周囲にいる人々が戸惑い混じりにざわつき始める。所詮彼らはただの一般人、まだこの男がテロ犯だということに気付けず、学生らしき男の子がいきなり大人の男性にタックルをお見舞いした、程度にしか思えていないだろう。

「つ、手榴弾は！？」

今の一撃、倒れた際に頭でも打つたのか。すでに氣絶している男の手　そこに、手榴弾がない。

慌てて上空に視線を向けると、ピンの抜かれた手榴弾が空を舞い、ステージの手前付近に落下する直前だった。

完全に爆発するまでおそらくあと数秒。

結城は歯を食いしばり、両足に全身のエネルギーを収束させ、折り曲げた膝をバネのように思いつきり伸ばすと同時に、まるで野球のスライディングキャッチでもするように両足で地面を蹴り飛ばした。第三者から見たら、それは圧倒的身体能力と反射神経があつてこそ動きだつただろう。

(届け  
!)

落下する手榴弾が地面にふれる一歩手前、合間に手を滑り込ませた結城がギリギリのところでそれをキャッチする。勢いに乗った体がステージのセットに激しく激突するが、今はその痛みに身をゆだねている暇もない。

倒れたまま、手榴弾を持つ手を思いつきり振りかぶり、全身の力を込めてその腕を振り抜く。

空へと。

そして、次の瞬間。

ドオオオオオオオン!! という轟音が辺り一面へと響き渡り。

上空で爆発した手榴弾は小さな爆炎と激しい暴風を撒き散らして四散した。

思わず両腕で田を覆い、視界をシャットアウトしてしまつ。それぐらい強力な衝撃が結城の元まで伝わってきた。

たつた一個の手榴弾から巻き起こつた爆発に、腕を下ろして辺りを確認するにそこは喧騒に包まれていた。男性も女性も慌てふためき、爆音を聞きつけた野次馬も集まり始めている。大勢の人々が携帯で写真を撮つていったりコソコソと言葉を交わしたりと、大忙しだある。

そんな中結城は小さく息を吐き出して、辺りに視線を巡らせる。そして手榴弾の爆発が人々の空氣以外に影響を与えていない事を確

認すると、全身から力が抜け、今度こそ思いつきり息を吐き出す事が出来た。

上空に投げて正解だった。

ステージに炎が燃え移っている事もなく、傷を負っている者もおそらくいない。なんとか被害を最小限に食い止める事ができた訳である。

結城は、地面に仰向けで気絶している手榴弾を投げた犯人に対して一瞥して、

「お仕事完了」

ゆっくりと、呟いた。

## 1：特殊護衛機関『ジェシータ』

特殊護衛機関『ジェシータ』。

ロシア語で『守り』というその名の由来を持つ、世界でも数か所にしかない最高峰の護衛機関。その一つが、日本の東京都に在住する。

『ごく一部の政府関係者や大財閥の人間しか知ることの許されない世界の裏事情。その一片を担うのがこの『ジェシータ』。』

『ジェシータ』に所属する人間はみな、通常のSPとは違った特殊な訓練と技能を学び、依頼者から前払いの契約金を貰つてその身柄を期間内護衛する。彼らは『ガード』と呼ばれ、護身術とは違つた、敵を本当の意味で殺しに掛る近接格闘術。政府によつて特別に許された銃器、刃物の持ち歩き、それを使用した特殊な訓練。さらには高度な情報処理能力まで身につけ、依頼者を徹底的に守り抜くのが仕事だ。

政治家の演説中の警護から、総理の外出の際の警護、海外から訪れるVIPの警護まで、その対象は様々。ただ一つ共通して言える事は、その誰もが命を狙われてもおかしくないほどの要人であること。『ガード』はそれらの犯行を幾重にも阻止してきた、政府に絶対的な信頼を寄せられる護衛機関というわけだ。

無論、世界の裏、その一片を担うだけあって『ジェシータ』の存在が公の場に知られる訳にはいかない。たつた一つの組織の為に国の税金が莫大に動くことだってしばしば、もしそのような事を国民にでも知られたら国がどうなるか分かったものではないのだ。

そして、17歳。男。諏訪部結城。

彼もまた、特殊護衛機関『ジエシータ』に身を置くガードの一人だ。

一般的な日本人らしい黒髪に、男性にしては大きめの瞳。少し細めの体の線を持つ彼も、見かけによらずガードとしての十分な技能を身に秘めている一人である。

まだ幼い頃、諸々の事情で両親を亡くした末に結果的に身を置く事になったこの組織。入った当初から肉体の構造を壊すようなおそろしい訓練を毎日のように受けて、未成年にも関わらず銃器の扱いには人一倍慣れている。

まだ学生の身分にも関わらず、すでに命懸けの仕事に没頭している結城はおそらく異常と言えよ。だが結城本人にしてみれば、そんな毎日が当たり前であり、大した苦悩もない。これが彼にとっての日常なのだ。

そんな若くして一人前のガードである諏訪部結城は今、東京新宿にデカデカと鎮座している高層ビル、『ジエシータ』日本支部の廊下を面倒くさげに歩いていた。

彼の向かう先は社長室……なのだが、この建物、相当の面積と高さを誇っているせいで毎度毎度目的の場所へ向かうのにかなりの時間をしてしまう。しかも『ジエシータ』の日本支部とか言っておきながら、1階から29階までは全く別用途の建物。実際に『ジエシータ』本部となっているのは30階から35階の計5階スペースのみである。世界最高峰がこれなのだから少し哀れだ。

世間的にはあまり知られてはいけない組織なのだからひつそりとしているのも当たり前かもしれないが、もうちょっと豪遊してもいいんじゃないの？ というのが結城の見解である。

「ねえ、綾羽」

結城は隣を歩く少女 自分よりも頭半個分ほど小さい背丈と茶髪のポニー・テールをする女の子に、口慰めがてら言葉を向かた。

『ん?』と小さく相槌を打つてこちらに視線を投げて掛けてくる少女に、結城は得意げに笑つて見せた。

「今日の俺、どうだつた? マジで格好良くなかった?」

「……自信満々のドヤ顔で言つてるとこりう悪いけど、いざつて時に通信を切られてあたしはそっちの様子が何一つ分からなかつたんだけど」

「……はあ、残念だ。せつかく俺のイカしてる勇士を綾羽に見てもらいたかったのに、通信が切れてしまつだなんてつ!」

「自分で切つといでよく言つわね」

この冗談が言い合える仲の少女、たちはなあやは橘綾羽は結城と同様『ジェシータ』メンバーの一人である。

結城がこの組織に来た当初から仲良く接していく、今では幼馴染みと言い合えるほどの関係。小さい頃からこの組織に身を置いているらしく、サポートメンバーの一員としてガードをバックアップする役割を担つている。

物騒な組織で育まれた幼馴染み関係、というのも実に珍しいものだ。結城や、おそらく綾羽にとつても大して気にするところではないのだけども。

「……結局、犯人は手榴弾を使ってたんだつてね」

唐突に綾羽が話を切り替えた。

犯人の使用した武器 手榴弾。彼女はサポートメンバーとし

て後始末のために現場へ赴いていた。その時に他の誰かから耳にしたのだろう。

「そりそり、そりそりだよ。てっきり拳銃か何かだと思って、斎藤氏には事前に防弾チョッキを着てもらつたんだけど……どうりで犯人の奴、自信満々な犯行予告だつたわけだ」

「あのメッセージは警察にかなり挑発的だつたものね……」

先の応援演説会。実はその三日前に、犯人の男からと思われる犯行予告のメッセージが警察のほうに届いていたのだ。

結城と綾羽もそのメッセージに一度目を通したことがあるが……あれは酷いメッセージだった。警察に対し悪い思い出でもあるかつてぐらい警察のことを口にした文章を連ねて、斎藤氏の政治界でのやり方が気に食わないのか、斎藤史孝を徹底的に罵倒。拳句の果てには絶対に殺すとまで宣言してあった。

ただまあ、斎藤氏本人が『ジエシータ』に護衛依頼を出したのが犯人にとって最大の失敗だつただろう。ガード一人分の契約金と引き換えに結城が会場に派遣されたせいで、結果的に犯行は失敗。結城としては一言、『まあ（笑）』と言わせてもらおう。

「まあ

「え？」

「いやなんでもない。結局のところあの手榴弾つてどこで手に入れただろうな。海外の通販か何かかな？」

「たぶんね。今はネットとそれなりの知識さえあれば何でもできる時代だし。そろそろかりは犯人の身元を調査してくる警察のみぞ知る、

つて奴だと思うよ

本人はこう口にしているが、もし彼女が本腰入れて犯人のことを調べればあの男に関する情報という情報を知り尽くすことが可能だろ。

大した身体能力もなければ銃器に関する扱いも慣れていない綾羽が『ジェシータ』に身を置いている最大の理由が、彼女の持つ天才的な情報処理能力とハッキング技術だ。そこらのコンピューターに愛用のノートPCでハッキングを仕掛け、監視カメラの映像を盗み見したり個人情報を丸ごと奪い取つたりと様々な用途で『ジェシータ』のガード達をサポートする。

そんな天才ハッカーの綾羽が自分専属のサポートメンバーでいてくれるのだから、結城としてはありがたみを思えなければならない。事実、彼女が居なければ成功することのできなかつた仕事を過去に何件も経験している。綾羽様々つて奴だ。

「まあ何にせよ、今回も無事に終わって諏訪部さんはご安心ですよー」

「だね」

ぐどいようだが、『ジェシータ』での仕事は命懸けだ。一瞬の判断が命取りになる。いざとなつたら自分の身を挺してまで要人を護るのが結城の役目。

規模の小さい仕事あれ、こうして無事に成功を収めることができただけで十分に名誉なことだ。まあ、名誉と言つてもガードの取つた手柄は金になるだけで、世間的には『勇敢な一般人の活躍で』とかの理由がこじつけられて公表される。そのため結城が世界的な名人！ というレッテルを貼られることはまずあり得ないが。

「ああそうだ、綾羽。今日の晩飯、どこかで外食しないか？ どうせ報酬金も出るんだしさ」

「外食？ んー……」

結城の誘いに『んむむむ』とか難しい顔で唸る綾羽。なぜか意味もなく額に指を当てて考え込むポーズをとっている。

「どうかしたん？」

「いや……食べに行く場所によつては結構お金かかるだらうし、今月のスケジュールを……」

……お宅の家計簿はそんなに酷い有様なのでしょうか。

「なに？ そんなに家計厳しいの？」

尋ねるとますます難しい顔になる。

「つひ、お父さんがお金遣い荒いから……。先月もタバコと弾薬とパチンコでどれだけのお金を無断に消費させられたか……」

「ああー……」

一人暮らしの結城にその気持ちはよく分からないが、綾羽の父親とは結構な頻度で顔を合わせる。あの人の性格を考えれば何となくだか彼女の苦労が想像できた。

「別に無理に付き合つ必要はないぞ？ 余裕のある日にまた改めてやる

「それはそうなんだけど……最近は結城と一人で食事することもなかつたから……」

「？ なに、俺と食事することって何か意味あんの？」

「へ？ あ、いや、それはその……」

不意に顔を背け、なぜか恥ずかしそうに薄く頬を染める綾羽。チラチラと横目でこちらの様子を窺ってくる。

しばらくその行為を繰り返して、拳句の果てには『鈍いんだから……』とか恨めしげにボソッと呟いてくる。どういうことだらう？ ただ何となく分かるのは、彼女も外食には行きたいんだろう。結城はしばらく考えると、

「……じゃあ今日は俺の奢りにしよう」

「え？」

「なあに、俺は一人暮らしで金にも余裕があるからね。たまには誰かにメシを奢るつてのも悪くないと思ったのよ」

結城の言葉に綾羽はちょっとだけ驚いた様子で目を見開いた。

「……いいの？」

「綾羽がいいのなら」

「……ん……」

お金に困る人はその分お金の大切さが分かる、とよく言われるが綾羽はそれにしつかりと当てはまる一人。誰かに奢られるという行為に多少抵抗があるのだろう。

が、少し考えてすぐに踏ん切りがついたのか、綾羽は小さく微笑んだ。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな。」ちになりますっ

「あいよ。でも食べに行く場所は安いところで頼むぞー」

「……どうでもいいけど結城って、上げて落としたりその逆だったりつていうの多いよね」

「こきなり何の話ですか」

素っ気無い廊下を歩きつつ、どこに行くかとかあこは不味いとか話しながら目的の社長室へ向かう。

そんなこんなで数分後、二人並んで社長室の前に到着した。社長室といつても大して飾りつ氣のない扉に、中もそれっぽい机と書類を溜め込むいくつかの棚、あとは客人用のテーブルとソファーしかない。

そもそも社長室 자체、『ジェシータ』の総長が業務関連の仕事をするだけの場だ。必要な機能だけを取り揃えたシンプルな部屋であり、それ以上でもそれ以下でもない。

ドアに軽くノックする。が、返事がない。仕方なく結城は中へ呼びかけた。

「総長、入りますよ?」

それでも返事がない。

少々戸惑つたが、容赦なく扉を開ける」とした。別にあのおっさんには遠慮したところで何も出ない。

ドアノブを回し、扉を開け放つ。

次の瞬間。

「ゴウちゃーん！　お父さん新しく洋服買つてあげたから着てみてびよーん……」

……サングラスをかけたスーツのおっさん、ひらひらのワンピースを持って突撃してきたのでとりあえず扉を閉めた。

「…………」

「…………あー、あの？　結城。お父さんのこと、無視しちゃつてもいいの？」

「認めない。あんな奴が父親だなんて、俺は絶対に認めないぞ…………」

と黙つてもこのままでは埒が明かない。

一度気持ちを落ち着かせ、念のためにこじが社長室であることを確認し、息を吐く。仕方なくもう一度扉を開いた。

すると先程のスーツのおっさんはなぜか床に四つん這いになつて両手を突き、涙でも堪えるようにブルブルと震えていた。

おっさんは言つ。

「うう……うう……ひどい！　ゴウちゃんつたりお父さんの好意を真顔で無視するなんてつーこれが親離れなの！？　うう、そんなの認めたくないつ…………！」

「息子として主にあんたの趣味を認めたくないよ。で、いつか何でいきなり女性物のワンピースなんか持ち出して来るんだよ……」

「もうひー、恥ずかしがつちゃって！ さつきも言つたでしょ、お父さんがわざわざ買ってきてあげたに決まってるじゃない！」

「とつあえず精神科に行こうか」

空っぽな頭してるだろ……？ じつは、40代の男なんだぜ……。真っ黒なサングラスを掛け、同じく黒いスーツ。短い髪をホテルマンのようにアップで固め、一見ヤクザの頭にでも見えそうなこのおっさんこそが、認めたくないものだが特殊護衛機関『ジェシータ』の総長である。

本名は諏訪部正臣まさおみ。……言わずとも分かるだろ？ が、結城の父親である。

先に釘を刺しておくが、血の繋がる実の父親つて訳じゃない。結城の本当の両親は幼い頃に一人とも亡くなつた。今ここに居る『親父』は、両親が亡くなつた際に結城を引き取つてくれた義理の父親とこう意味だ。

幼い頃の結城に近接格闘術と銃器・刃物の扱いを教授してきたのもこの人。色々と訳ありだった結城を自分の家族として迎え、わざわざ『ジェシータ』での仕事のため結城を育て上げた過去は彼がよほど寛大な心の持ち主であることを納得させる。

……のだが。

「ほら、ユウちゃんって結構女顔じゃん？ 体も少し細めだし。だから絶対に女装が似合つと思うのよ」

「そのユウちゃんって呼び方やめてくれませんか。それと俺は列記

とした男でして、女顔とか言われるのは不本意……」

「だから照れないのつー。騙されたと思つて着てみなせーなー。」

「……」

年の割りにやたらトーンの高い声で、人の話に耳を貸さず女装をせがんぐる総長の姿はただの変態クソジジイにしか見えない。義理とはいへ、息子としては頭を抱えてしまつ家庭的問題だ……。

「ねえ、綾羽ちゃんもわかつ思つだらうへ。コウサちゃんには絶対に女装が似合つて」

「え？ あ、あたしですか？」

突然話を振られた綾羽が戸惑いがちにあたふたし始める。たぶん苦手なんだらうな、この人と会話……。

まあ、それを言つならこの『ジンシータ』内に苦手じゃない人なんていないと思つた。

「ま、まあ、確かに結城の顔は、格好いいといつよつ可愛いくに部類されると思ひますけど……田もちよつと大きいですしつ……」

「セー！ 真面目に答えないでよろこびー！ そんなこと思つて人のはすぐ調子に乗つて……！」

「だよねー！ やつぱりセーだよねー！ 綾羽ちゃんもわかつ思つよねー！ ほーら見ろやつぱくウちゃんには女装の才能があるー。お父さんとの田に狂いはなかつたー！」

「ほ、ほら見れ……。大体あんた、少しばは自分の歳を考えろ！歳を！」

「見た目は大人。頭脳は、」

「つるさい黙れ！ああちくしょ、これじゃ全然話が進まないんだけど…」

少しずつカオスと化してきた場の空氣の中で、何一つ空氣を読まずにぎやあぎやあと事態を悪化させていく『ジエシータ』の最高権利者。

今更だが、目の前の親馬鹿が実は物凄く護衛のプロで、どんなもしない実力の持ち主だつたりすることを誰が信じられよ？……なんだから言つても、一応は組織内トップの人間なのだ。

それから数分、しつこいほどに女装をせがんでくるバカ親父をようやく落ち着かせる事に成功する。その間実力行使に走った総長が無理矢理に結城の服を剥ぎ取ろうと突撃してきたり、何とかタンスを開いたらワンピース以外の女性物の服が大量に溢れてきたりと大変だったのだが、その辺は割愛しておこう。

「はあ……総長、少しばは眞面目に仕事らしことをしてくださいよ

……

「パパつて呼んでくれなきゃ相手しない」

「もう帰つて良いですか？」

「いやーん！ もつとパパに構つてよコウちゅあーんーー！」

駄目だコイツ早く何とかしないと。

といった感じで、ここまで経つても話のサイクルがループするばかりだ……。

「総長、いい加減に本題へ移りましょうよ」

「ん？ 本題ってなに？」

「ワンピース持つてスタンバイしてるぐらいのこと待ち構えていたくせしてその言い草かよ！ 少し頭の中クリーニングしてこいよバカ親父！」

「し、仕事の報酬を貰いに来たんですよ。総長」

あとから綾羽が補足を付け加えてくれる。その言葉を聞いてようやく理解したのか、それとも思い出したフリでもしたのか、総長は『あつ、そういうえば』みたいな顔で表情を愉快に輝かせ、ポンと手と叩いた。

「やうならそようと最初から言つてくれればいいのに。本当にもう、ゴウちゃんは怒鳴つてばかりなんだから」

怒鳴らせている本人に言わると物凄く腹が立つもんなんですね。

結城がこめかみをピクピク震えさせ怒りのパラメーターを踏み留めている中、総長は業務用のデスクの元まで戻ると引き出しを開き、中から『ゴウちゃん（ ）』と『橘 綾羽』の名前が記された封筒をそれぞれ一つずつ取り出す。報酬金として依頼主から貰ったお金と、ああいう風に仕分けしておくれのも総長の仕事なのだ。

「ほら、これが今回分の給料」

「……明らかに悪意の感じるこの名前には、ツッコミなしの方向性でいいんですね？」

結城と綾羽、互いに封筒を手渡してもらつ。封筒の重み的にあまり金額は入っていないのだろうが、せいぜい10万はあるだろう。綾羽の奴に限ってはさつそく封筒の中身を覗いて目を輝かせている。……ただし、10万と言つても実際にプライベートで使えるお金はこの半分も満たない。綾羽のようなサポートメンバーはまた別だろうが、ガードの場合はいざという時のために使用する自用の銃のお手入れと、新しい弾薬を購入するだけでかなりの金額を犠牲にする。もちろんその行為 자체は個人の自由なので別にやらなくて構わないのだが、大事な仕事の最中に『手入れ不足で銃がジャムしてしまい要人を守れませんでした』という言い訳は通用しない。いつでも万全に、些細なことのようでかなり大事なのだ。

「一人とも、今回の仕事は上出来だったぞ。特にユウちゃん。斎藤史孝氏がユウちゃんの活躍をべた褒めしてくれてパパは嬉しい限りだよ」

「そうですか。依頼主が満足してくれていたなら光榮ですよ。それと一人称『パパ』は気持ち悪いからやめてください

給料のお金を十二分に堪能し終えたのか、綾羽が横から顔を覗かせてくる。

今に限った事じやないが、こう近くで顔を見るとやつぱり可愛い顔してるよな、こいつ。

「しかし結城は凄いよ。ちょっと前までは訓練続きだったのに、今じゃ一人前のガードだもんね。ハッキングしか取り柄のないあた

「とは大違ひだよ」

「それは綾羽がいてこそだよ。そのハッキング能力がなきやどうにもならなかつた仕事は今までにいくらでもあつたし、綾羽のサポートにはいつも頼りつぱなしだし。感謝もしてる」

言つと、綾羽は少しだけ頬を上氣させて小さく笑みを浮かべた。

「えへへ……そう? ありがとう」

「まつたく、さすがユウちゃん! 女の子に媚びへつらう能力も人一倍なんだから! パパつてば誇らしいつ!」

……そしてこの人は、いつまで経つても頭の中にスポンジが詰まつてゐるらしい。

と、総長は不意にスーツの内ポケットに手を突っ込むと、中から一枚の折りたたまれた用紙を取り出す。それを広げつつ、変わらぬ調子で口を開いた。

「で、唐突なんだが……早速、明日から別件の仕事を向かつてほしいんだよね。一人が了承してくれるなら、だけど」

本当に唐突な話題変換だが、この人が部下に仕事を回してくるときは大体いつもこんな感じだ。綾羽共々、少しだけ表情が引き締まる。

「どんな仕事ですか?」

「んー、まあどりあえず」いつを見てくれ

総長は一つ折りにされていたA4用紙を表に向け、結城に向けて差し出していく。

そいつを受け取り、隣の綾羽と顔を覗かせて文面に目を通した。

「……？ なんですかこれ、ただの個人情報書類ですか？」

用紙に描かれているのは、見覚えのない女性の顔写真と、おそらくその女性のものであろう名前や年齢、住所に電話番号、あとは個人の履歴などが箇条書きで記されている。

簡単に言うなればその人物の細かい個人情報と過去の履歴が軽く纏められた一枚の紙だ。警察でもまともに扱う事のできない重要なブツだが、『ジエシータ』のような機密機関ならそれを容易に発行することができる。総長本人が必要だと判断し、その手のルートで手に入れた書類なんだろう。

「あつー！」

すると隣から覗いていた綾羽が驚きの表情と共に声を上げた。

「見覚えある顔だと思ったら、この人ヘンリー＝マンゼルだ！」

「？ なんだ綾羽、知ってるの？」

「知ってるも何も、海外発端にも関わらず最近日本でも人気の出てきた有名なアイドル歌手だよ。ていうか結城こそ知らなかつたのかなり有名なのに」

「うう……」

普段からあまりテレビや新聞に触れていない結城としてはそう言

われても困ってしまう。そもそも、アイドルだの何だのってのに興味を持つていのが最大の要因だと思う。

改めて書類の文面に目を通してみた。

名前はヘンリー＝マンゼル。女性。年齢は24。当たり前だが未婚だ。外人らしく作りの細い顔の輪郭に、白い肌。透き通るようなライトブルーの瞳が似合つ、ウェーブがかつた金髪の女性。なんて言うか、初見なら誰しも彼女のことを『美女』だと評するだろう。それくらい綺麗な顔立ちをしている。

学生時代の頃から音楽、俳優関連の専門校へ通っていたらしく、大学を出てすぐにアイドル事務所へ就職。他一人のアイドルとユニットを組み、当初は人気の乏しいグループとして活動していたらしい。が、その数年後、ユニット内の彼女だけが爆発的に人気を獲得し、今では個人のアイドル歌手として出身のアメリカを中心に活動中だそうだ。

それらの人気は現在、アメリカ以外の海外にも浸透中であり、綾羽の口ぶりから察するに日本でもそれなりに有名なんだろう。結城は書類から顔を上げると、眉をひそめつつ総長に訊ねた。

「……それで、この人が何か仕事に関係が？」

「うむ」 総長の領きは早い。「要点を先に述べれば、先日そのヘンリー＝マンゼルからウチ宛に依頼が届いた。明日の午後に開かれる特別コンサートで我々に警護を頼みたいそうだ」

「警護……？ でもこの人、海外にいるんですよね？」

まあ当たり前の疑問だ。

いくら『ジエシータ』の特別権限を振るつても、今から海外へ飛び立つてアメリカに上陸、そこから彼女の元へ向かい依頼を遂行するというのは多少無理がある。

しかしその不可解な疑問に答えたのは、以外にも隣で話を聞く綾羽だった。

「結城つてホントにそういうのは何も知らないんだね……」

「え、え？」

綾羽は呆れたように一度息を吐くと、

「昨日……あれ、一昨日だつたかな？ まあどっちでもいいや。このヘンリー＝マンゼルがコンサートを開くために、わざわざ日本に来てるんだよ。ニュースで大々的に取り上げられてたじゃない」

「……お生憎様、そういう世間的な事には珍しい諏訪部さんであります」

「はあ……確かに結城の仕事柄、そういうのは別に詳しくなくても大した障害にはならないんだろうけど……。まさかウチに仕事を依頼してくるとは思つてなかつたなあ」

じゃあ綾羽の役職的には必要なのか？ といつぱりもこのい疑問は今は置いといて。

「つて事は、要するにそのコンサート中、彼女の護衛につけば良いわけですよね？ でもなんで俺達に？」

まあ、当然の疑問だろう。秘密裏の『ジェシータ』だつて人手が過疎つているわけではない。別に結城らに頼まなくたつて、もつと暇してるガードの連中はいるんじゃないのだろうか。

よりもよつて今日仕事が終わつた結城と綾羽に、明日決行の仕

事を頼むことはないと思つ。総長はそもそも自分の部下にやつこつ無理を強いるタイプではないのだし。

当の総長は結城のそんな疑問を事前に分かつていてよつてスラスリと答える。

「ヘンリー＝マンゼルから依頼の電話をもらつたのが不自然なくらい急すぎてな……。あまりに突然すぎて他のガードがほとんど出払つてゐるんだ。明日から完全にフリーリーのが一人しかいないんだよ」

「突然つて……いつ連絡がきたんですか？」

「今朝

確かに突然だ。

「……それは急すぎますね。そのコンサート中に何かやましいことでもあるんでしょうかね？」

「さあ、そこまでは分からん」総長は黒光りするサングラスを軽く掛け直しつつ、「ただ、私達の仕事は依頼者の身柄を徹底的に守り抜くことだ。彼女に依頼を申し込まれ、契約金を受け取つたからにはうだうだ言つてられん。仕事は仕事だからな」

「はあ……」

曖昧な返事を残しつつ、手元にあるヘンリー＝マンゼルの個人情報書類をぼんやり眺める。

別に仕事を断る気は無い。

少し気分が乗らないところもあるが、だからと言つて仕事を疎か

にするほど結城も体ならくではない。隣の綾羽も同じだろ。何も断りの言葉を口にしないからには仕事を請ける気でいるんだと思つ。むしろ彼女に関しては、超有名アイドル歌手に会えるって時点で多少瞳が輝いている気がする。

「ま、肩を軽くして護衛に当たればいいや。一人の他にも応援で一人その護衛に当たることになつてゐる。わづか負うことはない」

「了解」

総長がああ言つてゐるんだ、たぶんそこまでキツイ仕事ではないのだろう。

何も言わないといつことは、今日の斎藤史孝氏のように殺人予告があつたわけでもなければ、何らかの危機に瀕しているわけでもない。単純に依頼主の安全保護のために雇われた仕事だ。何も起こらない事を祈りつつほどほどに警護に当たればいいだろ。

綾羽が肩をつんつんと叩いてくる。振り向くと、彼女は胸の前で小さくガツツポーズを作つて見せた。

「結城、がんばりうねつ」

「おひ。無理しそぎない程度にな」

綾羽はざつちやん気に溢れているらしい。そんなにこのくんリー＝マンゼルとやらに会えるのが楽しみなのかね。

総長は一人の様子に満足げにつんうんと頷くと、

「とにかく今日はお疲れ様。一人ともよく頑張つたや。明日までゆっくり体を休めとくんだぞ」

「はい。じゃあ失礼します」

「総長もお疲れ様ですー」

礼儀として軽く挨拶を残して、綾羽と社長室をあとにするべく総長に背を向けた。

が、

「ああそりだ、コウちゃんコウちゃん。最後に一つだけ頼みたいことがあつたんだ」

まだ何があるのか、と足を止めて首だけで後ろに振り向くと、総長はガバッ！！！！ というとんでもない猛スピードで懐から何かを取り出した。

それはとても長く綺麗な黒髪で、生え際らしき中心点から流れれるようこ垂れ下がっている、まるでカツラのようにな……、

「女物の服が駄目ならせめてウイッグを被つてくれるとパパはすごく嬉しいかもッ！」

「人に休ませる気そらうしないだろテメー！――」

夜の東京は、その景色だけでも神秘的なものになる。

空は青黒く染まり浮遊する雲の輪郭すらも分からぬほど淀んでいるにも関わらず、地上では高層ビルや数多くの建物によって色とりどりに光り輝き、車道を走り抜ける多くの車と道行く道を行く人々で街はにぎわいに溢れる。

だからこそ日本最大の都会であり、東京都らしさなのだろう。それらが全て人工で作られ自然を破壊したものであつても、これにはこれでしか手に入れることの出来ない別種の神秘といつものが隠されているのだ。

そんな中、とある小さなビルの屋上。

無骨なコンクリートの地面を踏みしめるように、街の中心に二つの人影が浮かび上がっていた。

そこからは明らかに周囲の空氣にぞぐわない、異様な雰囲気がジワジワと漏れ出している。何か、とは言えない。まるでその一点のみ別次元のように、そこだけが異世界を作り出しているように、周りの空氣を喰い殺しながらその場に君臨する。

「 明日だっけ？」

なだらかな風に長い黒髪を揺らす小柄な少女が、夜の街並みを見下ろしながら口を開く。

車のエンジン音や風の産声に搔き消されそうなその小さな音を、しかし隣に立つ長身の男は一字一句聞き逃すことなく聞き入れた。

「ああ、間違いないよ。明日の昼過ぎ、近くの葛西臨海公園といつ場所で標的のコンサートが開かれるはずだ」

男の声はやわらかい。だけどその裏には、しつかりとした鋭い芯と自己主張が見え隠れしており、少女の耳までハキハキと言葉が届いてくる。

「その時が、もっとも狙いやすいタイミングのこと？」

「みたいだね。依頼主から共に提供された情報でしかないけど、確証が取れている。ソースも確実だ。間違いはないだろう」

聞き入れた少女は小さく頷き、しばらく自身の意識をおぼろげに漂わせる。

そして今ここにきた理由と、自分のやるべき事。それらを照らし合わせ、浮遊させ拡散させた意識と目的とを改めて固定した。

「迷いはないかい？」隣に立つ男がさりげなく口にする。「キミはまだ若い。確か『この類』の依頼をこなすのも今回が初めてだろう？　本当は辛いんじゃないのか？」

男の言葉に、僅かながら考えさせられるところはあった。

迷いがないかと聞かれれば無きにしも非ず、自分にはまだ早いんじゃないのかとか、どう理屈を並べたって残酷なことに変わりはない。だけど自分から名乗りを上げ、しつかりと引き受けたからにはそれを全うする義務がある。

今更退く訳にはいかない。

「……大丈夫。私だつてもう素人じゃない。他のみんなに会わせるのは当たり前なんだから」

「そうかい？　だけど……」

「大丈夫」

少し強調して男の言葉を制止する。それはまるで自分自身にも向

けられているような気さえ覚えさせた。

少女の言葉に何かを受け取ったのか、それ以上男が少女の心配を口にすることはなかつた。

夜の街並みへ降ろす視線を一度離し、上空へと視線を注ぐ。街から降り上がる光のせいか、星も、月も見えずに相変わらず真っ暗な夜空が東京都の真上に鎮座していた。それを忌々しく思つわけでもなければ歓迎するわけでもなく、少女は無心でじっと視線を送り続ける。

そして、一言。少女は口にする。

自分たちが狙う標的の名を。あらゆる迷いを取り除いて、やるべき事柄を脳内で形成し直すように、『殺すべき』相手の名を。

「ヘンリー＝マンゼル……」

一つの世界には、何十、何百、何万、何億もの『線』が世界の振興と共に一つ一つの道を辿っていく。

それは本来、互いが交わることがなく、平行した道を進むことによって自分自身を成長させ、いずれ孤独に消えていく。だが、ごく稀に。

本来交わることのない、交わるべきではない一つの『線』が交差し、世界の均衡を揺らすことがある。それはどこにでもありそうで何氣ない現象の一つだったとしても、確かな意味をその中枢に秘めている。

これは、未だ何も知らない少年と少女。  
何とも交わらない二つの『線』が、屈折し、互いの道に干渉する。  
たつたそれだけの物語。

翌日。

東京都全体の左端に鎮座している『葛西臨海公園』<sup>かさいりんかいこうえん</sup>は、数多くの人々によつて賑わいに溢れていた。

公園内には水族館を始め、レストランや出店、ホテル、拳句の果てには観覧車まであるといつ小さな遊園地つぶりをか持ち出しており、東京都内でもそれなりに有名なスポットとなつてゐる。特に葛西水族館に関しては、建物前の『空の広場』という大広間から葛西渚橋や富士山、東京ディズニーランドなどが眺める絶好の箇所であり、ドーム上の建物の外壁八割がガラス張り、中にはしつかりとした大水槽があるなど水族館としての機能も十二分に揃つてゐる。なんら特別な日でなくとも、観光客や一般客が大勢いる場所。それがここ、葛西臨海公園だ。

そして本日、7月中旬の真夏真つ盛り。

学生や世間的には休日、一部の会社勤めの人にとってはむしろ忙しい日曜日。

葛西臨海公園内にあるホテル『シーサイド江戸川』のすぐ手前、そこにあるアスファルトの大きなスペースは今、普段以上の賑わいを見せつつあつた。

理由は明確としている。今から数時間後、海外で活躍中の女性アイドル歌手ヘンリー・マンゼルの特別コンサートが開催されるからだ。

外人歌手といつともあつて少しばかりマイナーな部分があるせ

いか、日本の有名歌手のコンサートに比べたら大した人の賑わいではないのだが、それでも大勢あることに変わりはない。開催前現在でも、数百人の人々が事前に設置されていた大きめのステージ前に溢れかえっている現状である。

しかも屋外ステージなだけあって入場だのなんだのという概念が存在しない。故に、ヘンリー＝マンゼルの歌を聴きたいならタダで聴けるという訳になる。それが合い重なって、現在進行形で近くに群がつてくる人の波が止むことがないのだ。

（人が無駄に多いのって苦手なんだよな……）

そんな中、観客達の溢れかえる場所とは正反対、コンサートの準備を進めているステージ裏に結城はひっそりと佇んでいた。

音楽機器を運んだり、カメラの調整を行っているスタッフの方々をぼんやりと眺めながらちらちらと見える。

（障害が多いし、いざつて時に動きにくいし、もしかするとその中に敵のグルがいたりするかもしれないし……対して良いことはないよな）

考える事は無論、これから仕事についてだ。

昨日、斎藤史孝の護衛依頼を終えてその報告を行った際、ついでに貰った新たなお仕事。今からここでコンサートを開くヘンリー＝マンゼルの護衛。特殊護衛機関『ジェシータ』の一員としては、仕事前があらゆる危機的状況を脳内で想定し、その際どういう風に対処するのかインスピレーションをしておかなければならぬのだ。

が、やはり一般の人間が多いというのはどう物事が運んでもテメリットにしか働かない、と結城は思つ。

動きにいく、音が聞き取りにいく、危険を察しにいく、武器が使えない……。

メリットに働くことなんて何一つないのだ。

(じじていうなら自分の身を隠しやすい、だけど……それは敵にも言える。プライマイゼロじゃ意味がないんだよね)

それに反し、敵側からしてみれば好都合のバーゲンセールだ。いくら暴れようが目的を達することさえ出来れば言い訳だし、自分のみが危険になつた場合いざとなつたら一般から人質を取る事だって可能である。例えば先日の斎藤史孝氏の演説。犯人は周囲のことなどまったく気にすることなく、一撃で莫大な被害を齎すことの出来る手榴弾を行使した。

もしあの時、周囲を囮む人々がごく少數であつたら、斎藤氏の支持率が低かつたら。

結城がわざわざ無理して手榴弾を上空へ投げ飛ばす必要もなく、そもそも犯人を見つけるのに遅れを取らず、手榴弾のピンを抜かれること前に拘束することができた。

人が多いつてのは、まさしくハンデを負うようなものでしかないのだ。

(それを言い訳にしてたらこつまで経つても二流ガードに留まるんだけど)

ガードというのは、いつでも護る側の存在。要人の楯でしかない。その存在意義は決して剣ではないため、後勢に回るのは当たり前のことだ。こんなことでいちいち悩んでいることをあの馬鹿親父にでも知られたら、即座にネタにされて弄繩り回されるに違いないだろ。

まあ、今回の仕事は比較的安全だとは思う。馬鹿でもあつても、知識の持っている馬鹿親父も言つていたことだ。今回は犯罪予告があつたわけでも、ヘンリー＝マンゼル自身が物凄いVIPというわ

けでも、大富豪の『令嬢』というわけでもない。他より少し有名なアーティスト歌手、ただそれだけ。

今回の依頼も彼女自身の安全保護でしかないため、そもそも『敵』と判断すべき者が現れる可能性もごく僅かでしかない。特に注意することもなく、気軽に言えばいいのだろう。

(つーか、ただの保身でガードを雇つってのも珍しいよな……。ようほど金にあまりがあるのかね)

なんとも魅惑的な話だ。

ガード一人を雇うのに数十万の契約金が必要だというのに、安全に安全を重ねるためだけにいっぱしのガードを雇うなどと……普通のSPを雇つたほうが明らかに安くつくことが分かりきっているにも関わらず。

その金の余裕、少しぐらい分けて欲しいもんだ。

小さく息を吐いて、深く考えるのはそこで中止しておく。改めて周囲の光景に視線を移した。

今結城は、ステージセットの裏に背中を預けてぼーっとしているのだが、正直なところこうしている事が少しずつ辛くなっている頃合であった。

なんたつて結城の周りにいる人はみな、働いている。デカイ荷物運びからただの打ち合わせまで、もちろんのこと労働の差はあるがまったく動いていないのは結城だけなのだ。

そもそも結城がここに立つていれるのはヘンリー＝マンゼルの雇つたガードの一人であり、おそらく事前にそのことを聞いていたのであるう。

ここにいる人達は結城に対して妙に頭を下げがちだ。無論ガードの存在については公にできないため、『物凄く偉い人』とでも情報を受け取っているのだろうが……相手は見た目年齢学生の少年だぞ。というか実際に17歳だぞ。少しは疑つてくれたほうが気分が楽な

んだが。

試しに結城のいる方向へ視線を送っている一人の男性と無理矢理目を合わせてみる。

大慌てで頭を下げ、別の作業へ移ってしまった。  
せつときからこの調子なのである。

(……居心地が悪いなう)

ぼそっと心の中で呟いて、溜息を吐き出す。自分の将来的に、誰かの上に立つことはできないだろうなとかちょっと心配してしまう。仮に立つたとしても部下に任せることが出来ず、自分で率先して行動してしまう熱血社長さんにでもなってしまいそうだ。

(もし俺にも親父みたいな貪欲つぶりがあれば心配なんて必要ない  
んだろうけど)

あの父親とは実質血が繋がっていないため仕方ないのだけども。本当の父親がどういう性格だったのかはあまりにも昔のことすぎて記憶が曖昧なのだが……少なからず今の父親みたくはっちゃけてはいなかつたのだろう。

と、そんなことを考えている最中、隅の方で準備を進めていたスタッフ達が小さく騒ぎ始めた。

何かと思い、その周辺にいるスタッフがそちらへ視線を向ける。結城もめんどくさげに振り向いて　　ようやく、本日の主役が到着したようだ。

「おはよウ！」やこまわ

「ウンコーさん、おはよウ！ やこまます」

「おはよウ！」やこまわー

スタッフ各自の挨拶に対し、小さく頭を下げる女性。

ヘンリー＝マンゼル。

ウェーブがかつた金髪に、外人らしい碧眼。驚くほど細い体に長い足。肌は白く、まるでボディーソープのコマーシャルにでも出でるようなキメのよさだ。今はノースリーブのワンピースのような白い服を着こなし、腰に革のベルト巻いている。おそらくコンサート用の衣装なのだろう。

彼女は周囲に輝かしいほどの笑顔を振りまきながら、辺りに視線を巡らす。まるで何かを探してゐるかのようだ。その後結城と真正面から視線が合うと、一直線にこちらへ歩いてくる。

……って、俺？

ヘンリーは結城の目の前まで歩み寄ると、

「ハロー。あなたが頼んでいたガードの方かしりう？」

「え？ あ、つと……」

結城にしか聞こえない程度の声量で口を開き、尋ねてくる。あまりにも突然だったため、つい動搖して言葉を詰まらせてしまった。誤魔化すように慌てて咳払いをすると、軽く営業スマイルを作つて結城は言う。

「……はい。今回の護衛依頼のため、『ジエシータ』より派遣された諭訪部結城です。本日はよろしくお願ひします」

「あら、じー寧に。じーちーじーヨロシク。知ってるだりつけばヘンリー＝マンゼルよ」

そういうて、思わず見とれてしまいそうなほどの笑顔を浮かべるヘンリー。まさに美女の鏡とも言つたところか。金髪碧眼恐怖

るべし。それとおっぱい大きい。

しかも物凄く軽快な日本語だ。まるで最初から日本に住んでいたんじゃないかつてぐらり自然な質感である。おそらく彼女自身が自力で覚えたのだろうが、日本語は他国の言語と比べかなり難しい部類に入る。よほど学習を得てこの自然な喋りを身に付けたのだろう。それとおっぱい大きい。

つまり何が言いたいのかといつと、

……。

おっぱい大きい。

「あなた、随分と若いのね。いくつ?」

まあ気になつて当然である「」とをヘンリーが尋ねてくる。他のスタッフ達は結城が物凄く偉い誰かかと思つてゐるので聞けなかつたのだろうが、彼女には関係ないのだろう。

しかしどう答えたものか……まさか未成年が護衛につくとは思つていなかつただろうし、答えようつによつては依頼主からの信用を失墜して護衛がかなり困難なことになりかねるぞ……。

必死に頭をフル回転させた結城は、

「二、二じゅう」……

「ふふ、別に嘘はつかなくて良いわよ?」

バレただと!?

いや当たり前か……さすがに25は無理があるよね……。

「じゅ、17です……。一応、ガードと学生を掛け持ちしていましまして……」

結城の苦し紛れの馬鹿正直な回答に、しかしヘンリーは「まあ」と軽く驚くだけで特に拒否反応を見せることがなかつた。それどころか、

「そんなに若いのによくガードみたいな仕事を続けられるわね……。  
危ない仕事なのに大変じゃない?」

……なんていう、母性染みたことまで聞いてくる。どうとも思わないのだろうか? 未成年の少年なんかに自分の安全を任せることの行為が。もし結城がその立場ならかなりの不安を抱くかと思つたが。

よほど包容力がある人格をしているのだ。Jのヘンリー=マンゼルという女性は。

「……大変ですけど、一応この仕事に生き甲斐を感じてはいますので。もちろん正直なところでは諸々の事情で仕方なく、という部分もありますけどね」

「やう? でも、普通に学生をしてみたいとは思わないのかしら?」

「どつちかと聞かれれば、思いますね。でも……マンネリ? ってやつですか。今更自分が辛いとか不運だとか思いませんし、こういうのが当たり前だと思い込んでる部分がありますから」

結城の言葉に何を思つたのか、ヘンリーは一度間を置きつつ何かを考える。

が、それからすぐに元の優雅な微笑みへ戻ると、不意に結城に向けて片手を差し出してきた。

「……?」

「日本ではこうするのが当たり前なんでしょう?」 ヘンリーはさも当然のように、「アメリカの方では性別関係なく抱き合つたりするのが一般的な挨拶だけど、そういう事したらキミ、すぐに顔を赤くしそうなタイプだからやめておくわ」

ふふ、と悪戯つ子みたいな微笑を浮かべるヘンリー。

そんな事言われちゃつたらむしろ『抱き合いたいです!』と大声で宣言したいぐらいなのだが、んなこと言つて本当に抱きつかれたらパニックに陥ってしまう。本音は喉の奥で留めて、ヘンリーの綺麗な手を握り返した。

「カリ、結構面白い子だわ。時間があつたら一度お茶でもしたいぐらいね」

「は、はあ……」

なんか気に入られてしまつたっぽい。じつはそんな要因があつたんだろう?

それともヘンリー＝マンゼルは根っからこういつタイプなのか。だからこそ多くの人気と信頼とを勝ち得て、今ある地位まで向上してきたのかもしれない。

握手を交わした手を互いに引っ込め、ヘンリーはなにやら集団で固まつて話し込んでいるスタッフの集団に視線を送ると、

「……それじゃあワタシはこれから打ち合わせがあるから。今日一日、よろしく頼むわね」

「あ、はい。本日はよろしくお願ひします」

結城が軽く頭を下げるとも「一度だけヘンリーは微笑み、身を翻して歩いていつてしまつた。

その背中を見つめて、結城は思つ。

年上の女性って良いよね。

それから數十分後、総長兼結城の父親の言つていた応援のガードがようやく到着した。

相変わらずセットの裏に背中を預けつつ、年上のお姉さんタイプつてたまらないよねおっぱいとかおっぱいとかああでも貧乳も捨てられないなちっちゃい女の子つても実に魅惑的でたまんない、などある種の現実逃避を行つていた結城の肩がトントンと軽く叩かれて、その者の到着に気付くことができた。

「おひ、結城。元氣してるか？」

意識が現実に戻り、声の方向へと振り向くと、

巨大なライフルを背負つているいかついおっさんがそこにいた。

「かーつ、相変わらず可愛い顔してんなあお前。しかしそんな童顔としてとんでもない鍛え方してるんだから物騒な奴……」

「物騒なのはあんただよ！！ なんてもん背負つて平氣で歩いてんだ！ 少しは常識とか考えたらどうなんだよー。」

「？ なに怒つてんの？」

「無自覚！？ そんだけ形相なもん持ち歩いといて無自覚！？ おかしいだろ普通周りの目線でいけないことだつて気付くだろほら見ろよ明らかに周りの人間引いてるだろー。」

「ああ、そういうこに来るまで妙に見られてたなあ……。オレそんなに有名人だったのか？」

「ちげーよー ナチュラルにボケ構してんじゃねーよー とにかくそれ外してビツカ置いて來い！ こままじや警察呼ばれてコンサートビンゴやなくなるだろー。」

「なに！？ 警察呼ばれるよつな大層ヤバイことでも起きたのか！？」

「あんたの耳は何のためにつけてんだー 早くこいつのライフルをビツにかしきつて言つてんだよ！」

「ぬううおおつかー？ 結城お前なにをするー。」

とりあえず男の背負つてリマや映画でもそつ見ることのない巨大なライフルを無理矢理引っ張がし、隠せるよつな場所がなかつたので偶然にも近くにあつた池の中にぶん投げる作業で数分。返せ返せ弁償しようと泣き喚くおつさんをグーで殴り飛ばして黙らせるのにまた数分。その低脳に銃刀法違反の真髓を教え込ませるのにでさらりこ数分。

よつやく落ち着く」とのできた結城は、はあー、と思いつきり溜息をついてやつた。なんかここ数分でとんでもなく疲労が溜まつたぜ……。

ていうか本来の仕事より疲れてびうすんのよ……。

「うつ、うつ……ひどい！ オレの相棒を勝手に投げ捨てた拳句、ぶん殴るなんて！ 結城のバカ！ もう知らない！」

「ウチの親父みたいなこと言わないでください。気持ち悪いです。大体、いくら俺達は銃刀法が免除されるからって剥き出しで持ち歩く発想はおかしいでしょう……」

「まつ、同じ奴の予備が車に積んであるから良いけど

「絶対に持つてくんないよ。絶対にだ！」

結城達ガードは銃刀法が免除される扱いになつていて。理由はもちろん警護のため、いざとなつたら命を懸けた攻防戦になることもあり得るため政府から特別に許可が下りている。仮に銃を持ち歩いて警察に捕まつたとしても、自分がガードであることの証明さえ出来てしまえばその場ですぐに開放される。むしろガードだと確認することなくとつ捕まえた警察のほうに責任が転嫁するほどだ。

……だからと言つて黒光りする拳銃やライフルを剥き出しでホイホイ持ち歩くのもどうかと思うだろ？ しかもガードは世間的に秘密裏の存在。むしろ個人の存在を隠蔽しなければならないのに、銃器など持ち歩いて目立ちまくつたら意味がない。もしそれが重要な仕事の最中だつたら敵に自分の存在をアピールして無駄に警戒させるようなものである。

それを承知でバカみたいに巨大なライフルを持ち歩くこの男はある意味ガード失格なのだが……これで結城よりベテランなのだから

不思議なものだ。

「結城……お前は何も分かつてない。分かつてねえよ」

「いきなり何ですか……」

「何つてお前、ロマンだろロマン！ 男が生まれながらに持つ、ミリタリーへのロマンに決まつてんだろ！ 太陽の光を浴びて邪悪に光る黒のボディー！ 引き金を引くときの緊張感！ そして弾奏を吹き飛ばし、銃口から鉛球を射出！ 標的を射抜いた時の高揚感！ お前だつて少しは分かるだろ！ この血液に流れて全身に迸るような熱いプラスマが！！」

「いや、分かんないっす

「うへへへ、なんでだよ！ やつぱあれか！ お前顔が女みてえだもんな！ 実は男じやねーんだろ！ ジャなきやあり得ねーよ何も感じないなんて！ ほおら確認するから股間突き出しあがれ！」

「テメH人の股間を当然のように触ろうとするんじゃねーッ……」

紹介が遅れたが、このミコタリー馬鹿であるおっさんの名は橘義弘。<sup>たちばな よしひろ</sup>『ジエシータ』に所属してからのガード歴はもう10年を越えようとしているエリートの一人だ。

一応彼も要人を護るガードの一人ではあるのだが、多少イレギュラーな護り方をするタイプである。

そもそもガードとは『楯』の役割を持つ。が、義弘の場合は『楯』と『剣』を掛け持ちしているのだ。正確には銃。『ジエシータ』に身を置く以前からミリタリーファンだったたらしく、ガードになつて本物の銃を使えるようになつてからはひたすらに銃器の扱いばかり

鍛えたとか。その結果このように生糸のミリオタに成れ果ててしまい、スナイピングをもつとも得意とする異型のガードが仕上がった訳である。

趣向は少し食い違つていようとも好きなことを仕事に出来ているのだ。よほどのルンルン気分で毎日ガードを続けているに違いない。じやなきやこんな頭の弱い人格に育つたりしないもの。

「つたく……それで？ 義弘さんが応援のガードなんですか？」

「ん、そうだ。いやあ仕事から帰つた途端の新しい依頼だったから大慌てで来たぜ」

「どうも田の前のおっさんも結城や綾羽と同じ口からしい。報酬貰つついでに総長から頼まれたんだろうな。

「ああ、そうだ結城。お前に一つ聞きたいことがあったんだが……」

「なんすか。人手も揃つたからそろそろ綾羽含めてミーティングしたんですけど」

「いやな……今回の護衛つて、一体誰を守るん？」

「とんでもないことを口走りやがったよ」「イツ。

「なんだよ！ なんで護衛対象も把握していないんだよ！ あんたどんだけ今回の仕事をやる氣ないんだ！」

「総長が大急ぎつて言つからでつきり銃撃戦にでも飛び込むんじやないかと思って、ほら見てくれ。弾薬は持てるだけ持つて、手榴弾を5個、ついでにスタングレネードまで持ち出してきたんだけどな。

ははっ、無駄だつたぜ

「ははっ、じゃねえよ！ あんたは何と戦争しにここへ来たんだよ！ んな装備ぶら下げてたらむしろあんたが犯人扱いだつての！」

「まあまあ、そつ怒んなつて。ほらオレ取つて置きのプラスチック爆弾あげるから」

「いらねえよ！… そんなもんじで使うんだよ！ えつ、ていうかさつきから何これ？ 綾羽には悪いけどこのおっさんと余話してると絶対早死にするつて、割と切実に」

もう一度言つが、これでも田の前にいる橋義弘は結城より先輩である。

街中をライフル背負つて横断しようが、依頼内容をまつたく理解していなかろうが、自作の爆弾を後輩に譲ろうとしているが、先輩である。

しつこじょうだが一応先輩なのである。

「へへっ、褒めるなよ。恥ずかしいじゃねえか

「あ、駄目だ。さすがの俺も悟つたわ。これはもう駄目だ」

なんか会話を続けば続けるほど結城は頭を抱え込みたくなる。実力はともかく、今日一日はこんなとの共に仕事をこなすと考えるとやる気が消沈してしまつて気が気でなかつた。

「あつ、そういうやば……」

義弘は唐突に上着の隙間へ手を突つ込むと、何かを掴んで引き抜

いた。

そいつを結城の目の前に差し出してくる。

「危うく忘れるところだつたぜ……ほら、見てくれ」

それは一切れの紙だった。

一辺5センチほどに切られた正方形の紙。紙質はおそらく安物の「コピー用紙だろうか。それが何なのか、とこう話なのだが、奇妙なのはその紙切れに描かれているものだ。

見たこともない怪奇な文字……とでも言つべきなのか。見方によつては何かの図や模様と捉えることもできる。黒のマジックで落書きのかのように紙の中央に描かれているそれが、まっさきに結城の視界に飛び込んだ。

「？ ……なんぞこれ？」

結城の口から漏れた問いに、義弘はヒゲの生えた顎を撫でながら眉をひそめた。

「いやな？ ここへ来る最中に拾つたんだが、ひょっとしてよ

「怪しい？ これが？ ただの紙切れじゃないですか」

「いや、それはそうなんだが……」 義弘はどうも納得がいかないよつて、「これ一枚だけじゃないんだよ。観客が大勢集まっているステージ周辺にやたら多く散らばつてんだ。見渡しただけでもざつと数百枚はあるんじゃないかな？」

「数百枚つて……」

「何なら見て来いよ。人だからで分かりにくいだろ？けど、足もと見りやあすぐ分かるぞ」

俺が来たときはこんなものなかつたけどなあ……と内心思いながらも、結城は半信半疑でステージ脇から顔を覗かせる。

見ると、確かに。義弘の拾ってきた紙切れと同一のものが、やら大量にコンクリートの地面に散らばっているのが確認できた。無論気づいているのは結城達だけではなく、一般客として赴いている人々もそれに意識が取られ、人によつては手にとつてまじまじと眺めている人もいた。

「なんだあれ……。イタズラか何かじゃないんですか？」

「オレも最初はそう思つたんだけどな……。けど、イタズラにしちゃあ無意味すぎるだろ。ただのゴミ……それも落ちてたところでどうにもならない紙切れだぞ？」

「……掃除を手間取りせんため、とか？」

「セツトの片付けはともかく、園内のゴミ清掃は臨海公園側の仕事だろ。わざわざ今日この日、コンサート現場だけにゴミを撒き散らす理由がないだろ？」

「それは……、確かに」

紙切れを拾つた人々も、下を向いて気にかける人も、おやぢくコンサートの演出の一部か何かだとでも思つたのか。すぐに意識を離し、意識を外へと向けていく。

だが生憎、事前にコンサートの筋書きを聞かされている結城は、あのような演出のことを何一つ聞かされていない。現に作業服を着

たスタッフも紙切れの存在をただの「ミミ」か、または何かのイタズラと思い込んでいるらしい。一瞬気にとめるだけですぐに視線を外している。

結城としては『それがどうした』と一蹴してやりたことこのものだが、いつもあからさまでは現場に派遣されたガードとして多少なりとも気になってしまひ。

「誰かのイタズラか、はたまた別の何かか、こうもアバウトな代物じや検討もつかねえな」

「一体何なんでしょうね、これ。まあ、たかが紙切れが落ちてたとじりでじりともしませんけど」

結論を述べた結城の台詞で、とりあえず紙切れの話題については打ち切ることにした。

所詮は落書きが描かれたただのコピー用紙でしかない。地面に落ちていたところでヘンリー＝マンゼルの護衛にはなんら支障をきたさないのだし、無視しておいても問題ないだろう。

「ヒーリィでよお、結城」

義弘があからさまに結城の肩に腕を回していく。顔が近づいて視線だけで答えると、なぜか彼はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた。

「最近ヒーリィの綾羽とはどつなんよ、ん？」

……何を聞いてくるかと思えばそんなことが。

「ヒーリィ、普通ですけど」

「あ？ 普通？ ははーん、隠そつたつて無駄だぜ」

いや別に何も隠してないんですけど。

「お前、昨日綾羽に飯奢ったんだって？ あいつ帰ってきてから嬉しそうに話しゃがつてよ……オレあそのせいでカツプ麵だつたつてのに。」この「」の

「ただの愚痴じゃないですか……。確かに綾羽と安ヒファミレス行きましたけど」

空いた手でこちらの脇腹を握りこぶしで小突いてくる義弘。ほんといちいち言動が暑苦しいおっさんだが、まあこれくらいのことならソックリ入れずスルーできる結城である。

……次に、このスポンジ頭が口を開くまでは。

「で？ こつんなつたら綾羽を嫁に貰ってくれるんだ？」

「ふふう！？ げほつ！ じほつ！ て、てめ、いきなり何言つて……」

「お前今何歳だっけ？ 17だったか？ うーん、それならあと1年は待たないとな」

「てめえ自分が何言つてるか分かつてんの！？ え、なに、それ父親が言う発言じゃなくね？ 普通主人公の親友ポジション的な世話焼きキヤラが場を和ませるときに使う台詞、じゃね？ ねえおかしいよね！？」

「ああ、別に安心していいぞ。オレはそう簡単に娘をやるほど心広

くはないが、綾羽のことをよく理解してくれているお前になら気兼ねなく嫁にやれるからなつ！」

「聞けよ！ 話し聞けよ！ 清々しいドヤ顔で親指立てられても困るつての！ その歪曲した親バカつぶり何とかじろよ」「ハハー。」

「綾羽の奴は存外嫌な様子でもなかつたし。あいつは良い嫁さんになるぞ？ 飯は上手いし世話焼きだし、一途だし母性は強し……」

「だから話し聞けよ……」

ぎやあぎやあ叫んで義弘に掴みかかる結城だが、生憎このおつさんは話を聞くつもりが毛頭ないらしい。

本気で頭を抱えたい衝動に苛まれた。この父親からあの娘が生まれたのだから、現実はおかしなものである。

「大体！ 綾羽とは幼馴染み兼パートナーってだけで、別にこれといつて特別な関係つて訳じや、」

「あ、あー？ テメエせつかく綾羽から好かれてるつてのに眼中にねえだとコラア！！ 脳天撃ち抜いてやるから覚悟しろよ！」

「なんでそこでブチ切れんの！？ あんた一体どこまで親バカなんだよー！ そもそも綾羽から好かれてるつてお前どんだけポジティブな思考回路持つてんだ！」

スタッフの迷惑も顧みずセット裏で取つ組み合いを始めるガード  
バカ 2人。

その後、少し遅れて到着した綾羽に土下座させられて長い説教を食らつたのは言うまでもない。

午後の4時半頃。コンサートが開幕した。

豪華なセットの中央に歩み出てきた金髪美人・ヘンリー＝マンゼル自身の小さなトークから始まり、合図と共に一曲目がスタート。外人なのだから当たり前だが、綺麗な唇から流麗な英語がリズムに合わせて紡がれ、舞台のスピーカーからはポップな曲調の歌がステージ全体に響き渡っていた。

ヘンリーの歌声に合わせて合いの手やら声を掛ける観客の中結城は以前の斎藤氏同様、通信機のイヤホンを片耳に刺してそつとの喧騒の中央に紛れ込んでいた。何もしないでぼーっと突っ立つていれば、こういう場面の場合逆に目立ってしまうのではないかと思われがちだが、少し立ち位置を考えれば実際そうでもない。

業界用語では『デッドスボット』と呼ばれる、場の雰囲気、人の視線、物陰によってところどころに生じる完全なる死角。そこさえ位置取りできてしまえば、呆然と突っ立っていても何ら問題はないのである。

ちなみに綾羽と義弘の親子二人は、父親の場合ステージ裏にどんな状況でも動けるよう待機しており、娘は現場から少し離れたスタッフフルームの中で愛用のノートパソコンと向き合っている。今頃周辺の監視カメラにハッキングして、こちらの様子を無数の視点から観察しているところだろうか。

準備は万端。何かに狙われている確証もないのにここまで護衛を雇うヘンリーの気持ちは知れないが、仕事は仕事だ。何が起きても完璧に対処できる自信はあった。

『結局、お父さんとなに話してあんな騒ぎになつたの?』

イヤホンから女の子の声が届く。綾羽だ。

数分前、愛用PCの整備と事前の下調べで少し到着に遅れた綾羽が結城と義弘を説教してからというもの、何度も彼女に聞かれている質問である。

結城としては何と答えていいものか分からず、適当にはぐらかすしかないのだが。

「いやちょっと男同士のむさごトークをね」

『男同士って……まあ、話しごくことならいいけどな』

実際、なんて言えばいいのか分かつたもんじやない。

まさか『キミの父親が娘を嫁に出したがってる。この俺に』なんてこと言えるわけがない。ちょっと結城のレベルでは攻略不可能だ。大体、綾羽とは何ら特別なこともなく、仲のいい幼馴染みとして今までやつてきたというのに、どうしてあのおっさんは執拗に結城と綾羽の関係をくつつけたがるか。まったくもつて理解できない。  
……興味本位だが、ここは一つ聞いてみるか。

「綾羽。あのや」

『ん? なに?』

「綾羽つて好きな人とかいんの?」

『ふえつー?』

突如として驚きの声を上げる綾羽。こつちまでビビる。向こうに  
とつてはそんなに衝撃的な発言だったのか、『げほつ、げほつ』と  
か咳き込んでいるのが耳に届く。

「お、おい。大丈夫？」

『「」、「」めん。平氣だよ……』

なにをそんなに驚いたのか知らないが、そんな大声を上げるほど  
のことだらうか？ と朴念仁の諷訪部結城は首を捻るのだった。

『えつと、質問の意図がわからんんだけど……い、いきなりなん  
で？』

「いや、ちょっと気になつただけなんだけど……そこまで動搖する  
つてことはもしかしかして、」

『い、いない！ いないから！ 別に結城が思うよつな好きな人な  
んていなから！』

「？ 別に何も言ってな、」

『とにかくいないつたらいいのつ……』

予想外な否定っぷりである。

ここまで必死になられてはむしろ深い事情を知りたくなつてしま  
うのが人間の佐賀というものだが、まあ、本人がこう言つてているん  
だし実際好意を寄せる相手はいないのだろう。

しかし意外だった。綾羽ぐらいの良心的な女の子なら男友達の一  
人や二人いてもおかしくないものだが。

「そういうや綾羽が男友達と2人で歩いてるところ見たことないよな」

『えっ？　いや、うん。そ、その、み、見られても、困る、し……』

「？　困るって、なんですよ？」

『えっ？』

「えっ？」

『……』

「……」

『……ごめん、結城に期待した私がバカだった』

「はい？？？」

イヤホンの奥からでも、綾羽が呆れた様子で息を吐いたのが分かる。むう、まったくもって女心というものは理解しがたいな。解せぬ。

ちなみに、と言つては何だが。結城自信もあまり恋愛だの何だのといつのに触れた経験はない。

興味がまつたくない、と言つては嘘になるが、少なくともこの現状で恋に現を抜かしていられるほど結城も楽な生活を送つてはいいないわけで。綾羽も同じ。つまり、そういうことだ。

『……ああ、そうだ。変な話し振られるから言い逃したじゃない』  
ふと綾羽は思い出したように話を切り替え、『ちょっと結城に観

てもらいたい映像があるんだけど。ちょっとわざわざ転送するね』

観てもらいたい映像？ と結城が首を捻ったときには、すでに音楽プレイヤー型の通信端末にMP4形式の映像ファイルが送られた。不思議に思いつつも、言われたままにファイルを開いて再生を試みる。

観れば、それは今この現場 コンサートのステージを映し出しているものだった。

「これは……？ どこかの監視カメラの映像？」

『うん』

結城の問いに綾羽が頷いたのが何となく分かる。

『結城のいる場所から10メートルほど離れた先のカメラなんだけど、これは30分ぐらい前の映像』

「30分……ていうと、俺がここに到着してステージ裏で待機してた頃かな。これがどうかしたのか？」

『えっと、それがね……。あ、止めて…』

綾羽に叫ばれ、結城は反射的に映像を一時停止していた。なんだよ、と聞き返そうとしたところで……ふと気づく。画面の隅になにやら座しげなものが写っていたからだ。

「ん……？」

何となく気になってしまい、軽く操作してその隅へ映像を拡大さ

せる。そこに「写っていたのは、

『氣づいた?』 綾羽の真剣な声が耳に届く。『両手にいっぽいの紙切れを抱えた黒いコートの男が写ってるでしょ? そいつ、ちょっと怪しいと思わない?』

「……、」

思わず眉をひそめて、さらにその男へ画面を拡大していく。

うん、確かに分かる。画質が荒いため細かな特徴は分からないうが、真夏の癖して膝下まである黒いコートを羽織り、ティッシュを大量に握んでいるかのように小さな紙切れを両手いっぽいに握んでいるいかにも怪しい男。

ためしに一時停止を解除し、再び再生すると。

男は両手に持っていた紙切れを乱雑に地面へ投げ捨て、そそくさの画面の外へと消え去ってしまった。

『この男、コミを撒き散らして何がしたいのか分からないんだけど、ちょっとおかしいの』

「おかしい?」

『このカメラ意外に写っていないんだよ』

「……どうこうじゃ..」

『つまり、上手いことカメラの死角を通りているんじゃないかな…。人影に隠れていたのか、カメラの外からなのかは分からないけど、他の映像ではいつの間にか男のばら撒いていた紙切れと同じものが地面に散らばってる。さすがに変でしょ?』

綾羽の言葉に、釣られるようにして結城は足元に視線を向けていた。そこには無論、義弘とも不思議の思つていた奇妙な文字が描かれた謎の紙切れ。

つまり。

この男が、今地面に散らばっている大量の紙切れをばら撒いていた、ということか？

「……でも、別に気にするほどのことでもないんじゃないかな？」義弘さんとも話したけど、いくら地面にゴミが散らばっていても護衛の障害にはならないだろう？」

『まあ、それはそうなんだけど……。ただの一般人が、監視カメラの視界を避けつつこんなことできると思う？』

「……」

そう言われては、確かに頷くしかない。

大量に設置された監視カメラ。その包囲の中からカメラの死角を見つけ出すのは極めて難しいことだ。

今結城が『完全なる死角<sup>デッドスポット</sup>』を見つけて周りの空氣に馴染んでいるのにも言えることだが、それらのことは簡単にできる動きではない。監視カメラの場合、周囲にいくつあるのか、一つ一つのカメラが一体どれだけの視野を持つているのか、それらを完全に把握した上で始めて成り立つ。ただの素人が死角を見つけ出そうとしても、探している時点でカメラに写ってしまう。その上死角から死角への移動となると話にもならないだろう。

綾羽が言いたいのはそういうことだ。

結城たちガードでも難しいことを、たかがイタズラ目的の一般人にできる訳がない、と。

『もちろん結城の言つどおり地面に紙が落ちても支障はないから、本腰入れて調べる必要もないけど……。怪しきだけなら一級品だから。せめて注意ぐらいはしておいてね』

「……、了解」

改めて、結城は地面に落ちている紙切れを一枚拾い上げる。理解不能な奇妙な文字。いや、最早文字なのかも怪しいが……。どうせ今回の仕事はやることなくて暇な数時間超過しそうになるだろ？ 一つ調べてみるのも悪くないかもしれない。

「 紙羽。ちょっと調べてほしいことがあるんだけど」

『 なにかな？』

「 今からその男がばら撒いていた紙を撮つてそつちに送るから。暇つぶし程度でいいから 」

言ひながら通信端末のカメラモードを起動し、背面にあるレンズから景色が映し出される。

指に挟んで持っている紙切れを撮ろうと、結城はカメラを向けつつシャッターを切る。

その時だった。

轟ツ！！ と。

どこからともなく現れた、紅蓮の炎が辺り一体を煌びやかに照らし出した。

「……は？」

間抜けな声を上げて、思わず視線を上に向ける。

何かと思った。しかし、思つたときにはすでに遅かつた。

視線の先 そこには、結城や観客、ヘンリー＝マンゼルの頭上ほんの数メートルを横切る、まるで弾丸のように飛翔する炎の輝き。

一直線に突き進むそれはステージ脇に設置された巨大スピーカー目掛けて容赦なく着弾し、瞬間、「ゴオオ！」 といつ耳をつんざくような轟音が周囲一体に響き渡つた。

それが引き金となつた。

直後、観客達の悲鳴と絶叫で当たりはより大きな喧騒に包まれる。突然の事態に頭がぼうけっていた結城も、そこでようやく覚醒した。

「……ッ、何だ、今の……！」

慌てて意識を周囲へ向ける。観客達はミサイルでも突っ込んできたんじゃないかという驚愕の事態に慌てふためき、炎の直撃をくらつたスピーカーは大量の熱を撒き散らしつつ轟々と燃え盛っている。ステージ上のヘンリーはその光景を前にして、尻餅をついて呆然としていた。

一体何が起きたというのだ。

火炎放射器？ いや、違う。たかが油で炎を吹き出す兵器で、あの火力と衝撃はおかしい。ミサイル？ それも違う。ミサイルだったら今頃、ここ一帯が酷い惨状になっている。

なら何だ？ 今のは一体……、

しかし冷静に状況を分析している暇もなかつた。

「ま、また来るぞ！」

誰が叫んだのか。

慌てて振り向くと、再びさつきと同じ紅蓮の炎が熱波を吐き出してステージ全体に襲い来るところだつた。しかし、今回は一撃ではない。2つ、3つ、4つ……大量の輝きが上空を照らし、一直線にこちらへ飛来してくる。

「チツ、みんな伏せろ！！」

慌てて腹の底から声を張り上げ、結城は走り出す。行く先は無論、ステージ上のヘンリーだ。

た  
か

卷之六

といふどいろから響く無数の悲鳴。結城の性格からして思わず振り返つてしまつて、直進する炎の塊が、なぜか途中で軌道を変えてその先にいる男性へ突っ込もうとしている光景を目の当たりにする。

卷之三

男性が幸いにも結城の近くにいた所為か。慌てて伸ばした手が男性の首根っこを掴み手前に引き寄せたおかげで間一髪の救出。

しかし尚も進む炎弾はまたも直進する」とはなかつた。

勢いの落ちていた炎はそのままコンクリートの地面へ落下するかと思ひきや、またも先ほどと同じく急な方向転換を起こし、近くにあつた仕切りの柵へ直撃した。炎に包まれ、鈍い音を立てながら柵が地面をすべる。

どうなつてんだおい……！

流し見で周囲を確認すると、他でも似たような現象が起こっているようだった。

確かに直進していたはずの炎が、慣性の法則を無視してあり得ない方向へと向きを変える。かと思ひきやまたも引き寄せられるようにして方向転換。

まるで、そう。

わざと被害を甚大にさせたように、蛇のような動きで荒れ狂うようだ。

「ふざけやがつて！ 現実かよこれ！？」

『ゆ、結城！ ヘンリーさんか！』

イヤホンから届く綾羽の声にステージ上へ視線を向けると、ステージ真上に設置された無数のスポットライトに炎が直撃する。バキッ！ と関節を碎くような音が響いたかと思うと、ライトのガラスの破片が砕け散り、同時に炎に包まれたライトの一つが下に落下しようとしているというだった。

そしてその真下には、驚きを隠せずに睡然としているヘンリーの姿。

「ちりくしょうがッ！」

叫び、膝のバネを全力で使い一気に駆ける。ひとつ飛びでステージの上へ転がり込むと、最早体当たりでもしようかという勢いでヘンリーへ飛び込んだ。

「ツー！」

間一髪。

広げた腕の中にヘンリーの体をすっぽりと収め、しつかりと抱え込み、勢いに逆らわずステージの上を転がる。直後、ヘンリーの座り込んでいた場所にスポットライトが叩き落ちてきた。ガッシュニアン！！と激しく落下し、レンズが碎け、細部のパーツが砕け散る。カーペットの敷かれた木造の床を軽く砕き、深く沈みこんでいた。

「あ、あぶね……。ヘンリーさん、大丈夫ですか？」

「え、ええ……あなたは……」

「俺のことは良い。それより、早く安全な場所に逃げてください」

抱きとめていたヘンリーを放して、立ち上がりせる。見た感じ怪我はなさそうだ。一先ずは安心である。

改めて回りへ視線を向けると、なるほど、ステージの上からだと見え方がまったく異質であった。

荒れ狂う炎。逃げ惑う人々。燃え盛る「コンサート現場。

あまりの惨状に内心毒づき、結城はコンサートの範囲として凶切られた柵の出口付近、すでに迅速な非難活動を行っていた義弘へと視線を送った。向こうも視線に気づき、こちらに振り向いてくる。目線だけで伝えたいことを訴えかけると、義弘は迷うことなく頷いた。

よし、非難に関しては任せた大丈夫そうだな。

結城は傍らに震えて佇むヘンリーの肩に手を置くと、義弘のいるところを指差した。

「あそこのコンサーント出口、……つちの同僚がいる場所まで走ってください。あそこまで行けばもう安全です」

「だ、だけど……」

「低めの姿勢で走つてください。他の人とぶつからないように注意してくださいね」

何か言おうとしたヘンリーの言葉を無理矢理遮りつつ、その肩を押して前へ進ませる。一度こちらへ振り向いてくるが、すぐに前へ向き直つて走り始めた。多少無理矢理だが、こういう場合、情に流されて行動が遅れるより、後先考えずとにかく最善の選択を迅速に行つた方が効率的である。

よし、残るは……。

とりあえず危険なステージから地面に降り立ち、通信端末へ向けて声を放つた。

「綾羽。今から頼みたいことがあるんだけど……」

『大丈夫』

パートナーであり幼馴染みの声はすぐに帰ってきた。

まるで結城のやることを最初から分かっていたかのように。長年、共に仕事をしてきただけのことはあるってことだ。

『園内の監視カメラ全7~8箇所のカメラに潜り込んで、今見つけたよ。二人組みの男女……うん、男の方はさつき送った映像に映つた奴と同一人物だと思つ。コンサート会場から離れるように、一目散に走つてる』

『行き先は分かるか?』

『そこまでは……。だけど園内の外へ逃げようとしているのは確かだから、結城は西口へ向けて走つて。あたしがなんとかナビゲート

するか？」

「了解！」

言つと同時に、結城は地面を蹴つて走り出す。  
狙つべきはただ一つ。この原理不明な怪奇現象を起こした犯人を  
のみ。

「 つ、はあ、はあ……綾羽、次はどう?」

『えつと……ちょっと先で右に曲がって。路地裏に入れるから、そ  
こを真っ直ぐ』

綾羽に言われたとおりに、コンクリートの壁に挟まれた路地裏へ  
駆け込む。

葛西臨海公園から走り出して数十分。すでに結城は園内を抜け、  
街中を走り抜けていた。街中、といつても古びた家や商店があるこ  
とから東京の中でも旧地なのだが、なるほど、これなら身を隠すに  
は最適な場所かもしれない、と結城は走りながら分析する。

相当な距離が離れていると思われるため相手の2人組みとやらは  
追われていることに気づいていないだろうが、念でも入れているの  
だろうか。こうも古い地へ逃げ込まれると綾羽のハッキング能力が  
十分に生かせないため……そう、こんなことも起こりうるのだ。

『あの……結城……』

「わかつてゐる。そろそろ潜り込む先がなくなってきたんだろ?」

つまり、綾羽ストーカーが得意とする監視カメラへのハッキングを利用した目標の追跡。その基点ともなるべきカメラがこう寂しい地では十分に存在しないのである。

無論、綾羽のことだ。やううと思えばもつと他の方法で敵を追尾する」ともできるのだろうが、それにはやはり時間が掛かるのだろう、今時間を要する場合では何の意味もない。

『ごめん……。その代わりって言つたらなんだけど、二人組みの逃走ルートを織り出したから、今からデータをそつちに送るね』

「確實なのか?」

『……80%はね。今まで走ってきた逃走経路、道の選び方、カメラの避け方……色々あるんだけど、たぶん奴らの行き先是そこから先にある小さな灰ビル解体工事現場だと思う。詳しいことは行つて確かめてみて』

通信端末を手に取ると、丁度GPSのデータが送られてきたところだった。

開くと、綾羽の言つ灰ビルまでの経路が表示される。その道筋を即効で暗記してまつと、結城は再び正面へ向き直り足を動かし続ける。地面に転がっていたペットボトルを蹴り飛ばす。

『結城。そこから先はあたしじゃ見れないから音声だけでのサポートになるけど……』

「いや、いい」

『え?』

「ここから先は一人で大丈夫だよ。綾羽は義弘さんの手伝いに向かつてやつてくれ」

『いやでも結城。相手は武器も戦い方も分からないのに……』

『心配すんなって。守る相手がないだけマシだ。んじゃあ通信切るからな』

『ちよ、ちよっと待つて! またいつもの癖』

何か言つてゐる綾羽を黙らせるよつて無理矢理通信を切つて、イヤホンを外すと端末の電源も落とす。

やっぱり、うん。集中するときはこれに限るね。

綾羽のサポートがあるのありがたいのだが、やはり結城としては『一人で行動している』という状況の方が心が落ち着く。GPSデータの示す先も暗記はしたので何も問題はないだろう。

『さて……』

蒸し暑い風を肩で切りながら、視線を上へ向ける。まだ真夏といふこともあって空は青い。

時間はたっぷりある。敵を見つけるには十分だ。結城を再び意思を固め、正面へと向き直った。

しばらくして、ようやく目的地の灰ビルへ辿り着いた。  
なるほど、と思つ。確かにここなら身を隠しやすい。一応解体工

事中といつことであちこちに無骨なレンガ色の鉄骨が設置されるが、どうも今日が休日といつともあって作業員の姿は見当たらない。

全部で3階建てほどもあるコンクリートの壁が高くそびえるが、どうやら中は床が全て打ち抜かれているらしく屋上まで天井が突き抜けている。合間合間に橋のように鉄骨が架けられていた。結城は何とか身を隠しつつ何とか中に入り込む機会を窺うが、どうも人の気配が感じない。本当に綾羽の言う一人組みいるのだろうか？

「……」

決して気を緩めることなく、鉄骨の影から影へ、結城は身を隠しながら移動する。

そしてそれは、やはり誰もいないんじゃないかと思いついた瞬間のことだった。

「…………き、…………み…………ど、す…………ん、だ」

ふと、声が聞こえた。

「…………で、…………ぜ、つ…………か、い、を…………」

誰かいる。

反射的に脳が判断し、慌てて結城は踏み出しけた足を引っ込んだ。背中を預けていた鉄柱の影に全身を隠し、物音立てず、同時に注意深く聞き耳を立てる。

綾羽の予想が的中したこと願い、結城は出来る限り自身の気配を押さえ込んだ。

そして届いてきたのは、男女のやり取りだった。

「ふむ、じゃあ僕はもう一度現場へ戻るとするよ。田標の生死も大事だが、回収しなきゃならないものもあるからね」

「……ルーン?」

「ああ。ただの『コピー用紙だが、あれでも結構な費用がかかっているんだ」

何の会話だろ?、とすぐさま頭が理解しようと必死に回転するが、すぐに無意味なことだと思い思考を止める。問題のはいつ飛び込むべきなのか、それが重要だった。

「なら私は、ここで『ティラックの海を開拓させて誰も近づかないようにしておくから」

「任せたよ。キミにとっては初の仕事だつたり?、確實に『ヘンリー=マンゼル』の息の根を止めなければならぬからね」

「……うん」

ピクリ、と思わずこめかみが振るえた。

確かに聞こえた。確かにこの耳に届いた。『ヘンリー=マンゼルの息の根を止める』と。

つまり、答えは一つ。

今会話をしている二人組が、あの怪奇な現象を起こした犯人だ。

「じゃあ僕は行くよ。数分したら戻ってくるから」

「ええ。 いじは任せて」

聞こえる一人のやり取り。

どうやら男の方がコンサート会場へ戻るつもりなのだろう。奴らの目的が本当にヘンリーの殺害だとしたら、ヘンリーが生きてると知つて、またさつきのような原因不明の怪奇現象を起こされでは溜まつたもんじやない。

……なら、俺がやるべきことなんて簡単だよな。

ガードとして、仕事を全うするだけだ。

「ヘンリー＝マンゼルは生きてるよ」

吐息。

同時に俺は、鉄骨の影から姿を現した。堂々と、胸を張つて、自分で分かるくらいの清々しい笑みを浮かべて。

見えたのは、小柄な少女と、カメラに映つていたものとほぼ一致する黒いコートを着た長身の男。2人は突如現れた結城の存在に戸惑つているようだった。

そんな光景を前にして、結城の中で一つのスイッチが切り替わる。同時に断固たる意思が固定されて

「さあ、とりあえず捕まえてやるから覚悟しろ」



……と、自信たっぷりに出てきたのはいいものの。

諏訪部結城は内心物凄く困っていた。

「どうしよう……いやだつて相手2人だし、あんなバカみた  
いな炎を起こせる超兵器でも持つてたら俺なんて即効丸焦げじゃね  
えかコラ！」

いや、別にビビってる訳じゃないんだよ？ ビビってなんていいな  
いから。戦略的問題でちょっとアレなだけでビビってるわけじゃな  
いから、と顔面ドヤ顔全身冷や汗な言い訳たっぷりの結城であつた。

「……」

「……」

そんな結城の思いに反して、警戒心満載な目でじつとこちらを見  
つめている2人の男女。明らかに異様な雰囲気を持つそれらと視線  
をぶつけると、嫌でも結城の頭はこの状況を何とかしようと回転を  
始める。

事実、追いかけてきた身として目の前の一人を捕まえるべきな  
は確実。結城はそつと視線だけを動かして、一人の姿をピントに捉  
えた。

まず一人。男。見た感じ190近くの長身を口差しに照らされギ  
ラギラと輝く真っ黒なコートで包み、体つきは隠れてよく分からな

い。しかし地毛であるうストレートショートの金髪と、狼のように鋭い目つきの碧眼が存在感を現しており、彼が外国人であることは理解できた。

二人。女。こちらは典型的な日本人らしさが一目で分かるほど姿だった。腰近くまで伸びる美しい黒髪に、幼さの残る大きめの黒眼がそれを証明している。しかし彼女も隣の男と同じく、ストライプ模様の黒いブラウスの上からクリーム色のパーカーを羽織つており、下はホットパンツ。季節とはアンバランスな格好をしている。

一目見ただけならただの外国人観光客と私服を着た女子中高生程度にしか見えないのだが、明らかにこの二人は雰囲気が違った。何が違う、とは明確にいえないが、確かに他とは違う何かがこの二人からは感じられる。それこそが結城の動きを封じている最大の要因だつた。

「……何か、勘違いをしていいのか？」

沈黙を破つて外人の男から紛れもない日本語が漏れた。  
あまりにも綺麗な喋り方に驚くところだが、この現状ではそういう心の余裕を見せてことさえ躊躇われる。

「僕は今、隣の彼女に道を聞いていただけだ。これでも日本は初めてでね、気づいたらこんなところにいたよ」

とほ  
恍ける気か、瞬時に結城は判断した。  
男の饒舌は次々と言葉を紡ぐ。

「君が何を言つていいのかはよく分からぬが、ヘンリー＝マンゼルだの捕まえるだの何のことだか

、

「ずっとあんたらの事をつけてきた。……そう言つたら？」

ピクリ、と。

鎌をかけた言葉に、男の眉が一瞬震えたのを結城は見逃さなかつた。間違いない、今のは確實に動搖した証拠だ。

一気に畳み掛けるつもりで、結城の口は次々と言葉を吐き出した。

「証拠もある。監視カメラの映像であんたらをマーキングして、謎のテロが発生してからここまで走つてくる様子をしつかり把握済みだよ」

「……それで、君は僕達がコンサート会場でテロ行為を行つたと勝手に決め付けて、勝手に捕まえる氣かい？」

「へえ……別に俺、コンサート会場なんて一言も言つていないけどな」

またも男の眉間にしわが寄る。結城はわざとらしく口元に笑みを浮かべた。

確認するようでなんだが、これでも結城は史上最年少のガードである。基礎能力だけならかなりの実力だと自他共に認める。その一つである話術・意思固定能力についてもガードであることに最低限必要な能力なのだ。

「まあ、仮にあんたちが先のテロ事件にまったく関係なくとも、あの現場にて、タイミングよく逃げ出して、よりもつてこんな人気のない場所まで来たことは事実だ。少なくとも重要な参考人として、この場は拘束させてもらつ

『や、他に言つことはないか?』と結城は挑発的に付け加えた。いつもこの場面で大事なのはいかに自分が余裕の態度を保ち、反し

て相手にどれだけ墓穴を踏ませるか。結城の言葉に、男は少なからずこちらに対する警戒心を増している。 そう、この調子だ。

再び沈黙の幕が辺り一体を支配する。

もう言い逃れは出来まい、と次に男の言葉が発せられるのを結城はじつと待つ。やがて出でたのは、待つに待つていた言葉であった。

「……なるほど、どうやら君はただの一般人ではなさそうだ。僕達の行動は一部始終まで監視されていたようだね？」

やれやれ、と男はつまらなそうに口を開く。だがその諦めたような言葉は、同時に結城の言つ言葉に観念したことを裏付けているようなものだった。

「同業者……ではなさそうだけど、少なくとも只者ではなさそうだ。この状況どうしようか？」

口ぶりの割りにまつたく困った様子を見せていない男の言葉は、隣にいる小柄な少女へ向けられたものだ。少女はチラッとだけ視線で返すと、再び結城に対して視線を戻し 桜色の綺麗な唇が動いた。

「……関係のない一般人に思わぬ現場を押さえられた場合、排除するのが決まりじゃなかつたつけ？」

少女の言葉に、次に同様したのは結城の方であった。  
排除、と。確かに少女はこんな言葉を言つたか。

「どんな人物であれ、同業者でない場合は『魔術』の存在を知られるわけには行かない。それに関与する恐れがあるなら早めに対処し

ておいた方がいいんじゃない?」

「それもそうか……いや、だけど今もつとも優先すべきはヘンリー＝マンゼルの件だ。ぶっちゃけこんな奴の相手に時間を割いてる暇もないんだが……」

「一体何の話をしているのか、まったく意味が分からぬ。  
ただ一つ分かることは、彼らにとつて結城が邪魔な存在であるといつこと。何をするつもりなのか、警戒を怠るわけには行かない。

「なら、予定通りに動きましょ」少女がキッパリと言い放つ。「あなたは会場へ戻つて、私はここに残る。それでいいんじゃない?」

「ふむ、僕は別に構わないが……。君はそれでいいのかい? 彼の対処は全て任せることになるけど」

「いい、大丈夫。もう私は一人前なんだから」

言いながら、少女が一步、こちらへ踏み込んでくる。  
やる気か、と思った。しかしそれ以上に結城が危惧するべき」とは男のほうだった。思わず結城は口を挟んでいた。

「……なんだ、戻る気か? 一応言つとくけど、逃がす気はないぞ」

「別に追つてくるなら好きにすればいいさ。無論、」

男は余裕だった。

少女に反して、奴は一步、後ろへ下がる。そして僅かながら体が沈みこむ。何かを行う前の小さな予備動作。即座に判断した結城は、逃走をさせぬべく飛び出そうとして、

「捕まえられるとは限らないが」

瞬間。

男の体が、8メートル強も上空へ飛び上がった。

「なつ  
」

予想外の展開に思わず目を見開き、足を止めてその光景に見入ってしまう。

男は確かに自身の一の足で遙か上空まで飛び、真上に設置されたいた鉄骨の上に着地する。目が合ひつと、男は不敵に笑みを浮かべて再び圧倒的な跳躍力を見せ付ける。もとはガラス窓でもあったのだろう、すっぽりと壁の抜けた穴から男は外へと消えていった。

ど、ど、ど、うことだオイ……。

ずば抜けたど根性を持つてる結城でも、さすがに今起きた現象には唖然とさせられた。

もともと怪しい人間ではあつたが、さすがに今のジャンプ力はおかしい。『ジエシータ』の開発部署でリフレクトーストと呼ばれる人間の身体能力を補強する特殊スーストが開発中だが、その試作品でもあれほどの跳躍力は生み出せない。それがあることか人間の生足で、ほんのちょっと勢いをつけただけで再現できるであろうか。

答えはもちろん、否だ。

あまりにも奇怪な現象を前にして、炎の塊がコンサート会場を襲つた時と同様一瞬頭の中が空白で埋め尽くされる。

ハツと気づいたとき、すでに男の気配は完全に見失っていた。完全なミスである。

「へや、なんだってんだ……。」

男の行く先はコンサート会場。目的地は把握している。今から追えればまだ何とかなるかもしれないと結城の脳内が信号を放ち、すぐさま後を追いかけようと足を踏み出しかける。だが、

「あなたを行かせはしない」

立ちはだかるのは、無論男と共に行動をしていた黒髪少女だった。少女は結城の行く手を阻むようにして、彼の数メートル前で立ち塞がる。パークーと長い黒髪を僅かに風で揺らして、悠然とそこに立っている。

「……できれば、綺麗な女の子相手に拳は向けたくないんだけどね

思わず苦し紛れのキザな言葉を放つが、少女は僅かに目を細めるだけでまつたくの無関心らしい。

変わりに返つてくるのは、顔に似合わず冷たい言葉だった。

「どうやらあなたは、私達が思つている以上に変わった人らしい」

「ありがたいね」

「……放つておけば何をしでかすか分かつたものじゃない。もし『魔術』に触れられては後戻りできなくなる。確実に邪魔な存在になるわ」

「さつぱりだな。けど、あんたら一人をとつ捕まえて事情を聞き出せば済むことだ」

魔術だの何だの、少女の言葉の節々に理解し難い単語が垣間見えるが、現段階で分かっていることは一つ。彼女は結城を行かせるわけにはいかない。そして結城は、目の前の少女を押し通つてでも先ほどの男を追わなければならぬ。

ならば互いにとつてやるべき事はただ一つ。  
少女の口が小さく動いた。

「あなたにはここを 、 消えてもらひつー。」

開戦と同時に、結城は改めて少女の立ち振る舞いを確認する。

見たところ武器はなし。肩の並びも水平であることから、パークーの内ポケットに拳銃などを隠している可能性も薄いだろう。つまり相手は丸腰と考え突撃するのが最善なのが、

問題は、あいつらの攻撃手段だ。

今さつき起こった男の圧倒的跳躍力を考える。生身の人間とは思えないほどの身体能力だった。コンサート会場を襲つた炎の数々を思い出す。現実では考えられない、ミサイルのような質量ある炎だった。

奴らは何かがおかしい。結城のガードとしての勘が訴える。ただの理屈だけで丸腰だと思い込み、先手を仕掛けるのは軽率に思われるのだ。

そんな結城の思惑は、見事的中することとなる。

「『不敬者には懲悔を、罪人には業火を』」

少女の口から紡がれる、謎の言語。

それが一体何を意味するのか、とは思わない。何が起こる、とは思つた。

刹那。

ボツ、と。

まるでマッチの火を点けるように、ライターが火を灯すように、だけどそれは確実に周囲の酸素を食いちぎり、そして犠牲として。

少女の両拳が真っ赤な炎に包まれた。

結城はその光景を見て、またか、と驚愕すると同時に内心呆れる自分がいた。

今日一日、やたら不可思議な現象に遭遇するがここまで来ると笑えない。何らかの種と仕掛けがあるとは思うが、あまりにも現実離れしすぎていて度肝を抜かれっぱなしである。

しかし油断している暇もないだろう。

両手が轟々と燃え盛っているにも拘らず少女は火傷すら起こす気配がなく、ダラリと垂らしていた腕が小さく構えられる。

と、思った瞬間。

「ふ　　ッ！」

ダンシ、ヒアスファルトの地面を少女の足が蹴り。  
気づいたときには懷に潜り込まれていた。

「はやつ……！？」

それでも尚反射的に動けたのは鍛えられた動体視力があつてこそか。

すんでのところで身を捻り、真横へステップ。炎に包まれた、一体どれほどの威力があるかも不明な少女の拳が空を切る。ただそれだけで大量の火の粉が霧のように空を舞い、軽い熱波が結城の肌をチリチリと刺激してくる。

直撃でもしたらただじゃ済まない。本能的に理解した。

(危険すぎるだろ………)

理解すると同時に、大量の冷や汗が吹き出してくる。だが相手はそんな結城を待つてくれるほど生ぬるい敵ではない。

振り向き様、返す拳での一撃。対する拳での一撃が結城目掛けて飛んでくる。危険すぎるため防ぐこともカウンターを狙うこともできない結城は、後退しつつ何とか続く攻撃を避けるしかない。首を捻り、腰を引っ込め、身をかがめる。

一撃一撃が体の脇を通り過ぎ、舞い散る火の粉が降りかかるたびに結城自身に次々とプレッシャーがのしかかってくるようだった。

(くそ、なんとか隙を見つけ出して反撃しないと、ツ！？)

打開策を見つけ出すため必死に頭が回転するが、その一瞬を狙うようにして。

視界の外 つまり少女の右足が急激に跳ね上がり、結城の顔側面目掛けで振りぬかれた。

事前のラッシュのせいで回避は出来ない。

慌てて少女の足と自身の顔の間に防御用の腕を差し込み、瞬間。ドゴッ！ と。少女の華奢な足から出たとは思えない、痛恨の衝撃が結城の頭を揺らした。

「ぐう………？」

もし防御が間に合わなかつたら、そう思つだけで寒気がする。

予想を越える打撃に思わず足がふらつき 結城の僅かな隙を逃さぬが如く、いつの間にか引っ込めていた少女の右拳が、バシュツ、と空気を突き破る勢いで真つ直ぐに発射された。

「い、のお！」

揺さぶられる視界の中、それでも無理に体を動かし身を屈める。ギリギリのところで頭上を通り過ぎた少女の拳は、結城の髪の毛の先端を僅かに焼き切り、それだけでは留まらず背後に迫っていた鉄骨の柱に直撃。

「ゴオー！」と破壊的な音が当たりに響き、確かに鉄で出来たそれを深く折り曲がらせた。

結城は慌てて屈んだ体勢から真横へ転がり込み、ほんの5メートルほどだが少女と距離をとる。まるでダンボールのようにへし曲げられた鉄骨を見て、結城は心臓を掴まれているかのような思いにさせられた。

人外的破壊力に鍛えられた動き。

（これは一筋縄じゃいかないぞ……）

とつぐに結城の頭の中では危険信号が鳴り響いていた。

いくら正体不明の相手でも、所詮は小柄な女の子だ。僅かながらもなんとかなると思っていた自分がついさっきまで心の奥に潜んでいたが、最早油断は欠片も存在しない。

このまま舐めて掛かれば確実に痛い目を見る。それだけは避けたかった。

「……」

鉄骨から拳を引いて、再び結城の方に振り向く少女。すぐに突っ込んでくる気はないのだろう、冷たい瞳が結城の姿を射抜く。

少女の動きを注意深く捉えつつ、結城は彼女の戦い方に大方の予想を組み立てていた。

おそらく少女の戦い方 というよりもその体術は、身のこなし、拳の振り方を照らし合わせた結果、どの型にも当てはまらない独自の喧嘩殺法だと思われる。それに加え先ほどの蹴り上げ……出の速さと綺麗な腰の捻りを鑑みると、力ポエラ体術も一部ながらかじつてあると考えるべきだ。

説明不能な超破壊力を持つ拳の打撃から、隙を狙つて放たれる強力な足技。確かに、かなり考えられた戦法だ。

(でも、どんな戦い方にも必ず弱点がある)

考える。戦いとはそもそも、互いの力の差で決まるものではない。周囲の環境と敵の動きを把握できるほどの瞬発的な勘、そして状況判断能力が勝敗を別ける。ただ歴然なる実力では何も決まらない。いかに敵の弱みを握つて、どのようにしてそこを突くべきか、それが最も大事なのだ。

今結城に出来ること。敵の強力な一撃を何とか封じ込め、起死回生の一撃を放つことの出来る手札は一体何か。

数秒の沈黙の末、先に動いたのはまたも少女のほうだ。

しかし今回の一撃は飛び込んでの打撃ではない。そう分かったのは少女の腕の動きが、まるで野球のボールをアンダースローで投げるような構えであり、

(つて、まさか！？)

風を切つて横一閃に振り抜かれる少女の腕。

と同時に、まとわりつく炎が手と分離を起こし、それこそ野球ボ

ルを投げ放つたかのように射出される炎弾。まさにコンサート会場を襲つた現象と同一のものだ。

結城と少女の合間は約5メートル。

無論、反応できる時間など皆無に等しい。

(ま、ず……っ！？)

直進する炎弾は迷わず結城の下へ突き進む。目前に迫る炎。しかし動けない。熱が伝わる。しかし動けない。もしこのまま直撃したら火傷どころではなくなる。巨大スピーカーを易々吹つ飛ばしたように、結城のような人間程度、一瞬で火だるまにしてしまい生死に関わる重症を負わせられることだろう。しかし、そこまで分かつていも尚動けない。

この距離ではいくら結城でも避ける事が叶わず、ものの見事に炎弾の直撃をもらってしまう、  
だが次の瞬間、奇妙なことが起きた。

目と鼻の先まで迫つた炎が、結城を焼くはずだった炎が、  
その場で突如、90度の方向転換を行つた。

「は？」

「え？」

結城と、なぜか炎弾を放つた少女でさえ呆けた声を出してしまう。あの子からしても予想外のことなのか？ そう疑問が湧いた間にも、突如曲がった炎は近くにあつた作業用のスコップに着弾し、激しい衝撃と共に容赦なく吹き飛ばされた。

視界の隅でその光景を目につつ、結城の中で幾つかの疑問が浮上する。

少女でさえ今、困惑の表情を浮かべた現象。それはコンサート会場を襲つた炎と同じであつたと結城は思い至る。あの時も、直進していたはずの炎弾が突如方向転換をして被害を甚大にさせるという怪奇的なことが発生していた。

どうしたことだ？ 炎を曲げるのは本人の意思じゃないのか？ しかしその答えともいうべき台詞が、続いて少女の口から出てくるのを聞き逃しはしなかった。

「ま、まさか『ルーン』を持ってきて……？」

ルーン、と呼ばれるものが何なのか、それは結城には分からない。だがそれを聞いた瞬間、今までの少女と外人の男との会話が結城の頭の中でリフレインされる。

『ふむ、じゃあ僕はもう一度現場へ戻るとするよ。目標の生死も大事だが、回収しなきやならないものもあるからね』

『……ルーン？』

『ああ。ただのコピー用紙だが、あれでも結構な費用がかかっているんだ』

回収。ルーン。コピー用紙。

それらが示すものは何だ？ 一体何のことを探している？ そのルーンとやらを持っていると、何かが変わる？ それは……、

( こいつか！ )

ほんの数秒での確証のない閃き。だが、迷つてゐる暇はない。

結城はポケットに片手を突っ込むと、中でくしゃくしゃに折れ曲がっていたそれを引っ張り出す。 そう、コンサート会場でコートを着ていた男が意味も分からなくばら撒いていた、奇妙な文字

が描かれた謎の紙切れ。偶然にも持ち帰っていた一枚。

もし結城の判断が正しいとすれば、あの炎は……。

行動は早かつた。少女が未だスローイングの構えから動いていない僅かな隙を狙つて、結城は初の攻勢に入る。地面を蹴り、猛スピードで突進する。

「ツ！」

しかし、対する少女も反応が早い。カウンターで迎え撃つべく拳を引き、燃え盛る一撃が結城の顔面目掛けて打ち放たれた。

本来ならばここで、身の安全のため回避に走らなければならない。だが結城は横へ跳ぶことも体を捻ることもなく、

真正面から、少女の拳を片手で受け止めた。

燃える炎が止める結城の手へと伝わり、即座に全身を燃やす。紅蓮の炎は命尽きるまで結城の体を燃やし続け、文字通りの灰人を作り出す。

はずだった。

「そんなんつー!?」

少女の驚愕の声が上がる。

突き出された火炎の拳が受け止められたその瞬間 いや、正確には受け止められる寸前に、手を包む炎が完全に消失していたのだ。

受け止める結城の掌には、一枚の紙切れ。 そう、コンサート会場でばら撒かれていた謎の文字が描かれ、少女や先の男が『ルーン』と呼ぶもの。

結城の口元には自然と笑みが浮かんでいた。

「……どうやら君の紙切れ、君の出す炎を寄せ付けない性質があるみたいだね」

最早『弱点』は見破った。

「いや、正確には君の炎がこの紙を避けているのか。磁石がプラス同士、マイナス同士では受け付けないと同じ。理屈は分からぬけど、互いが反発しあっているらしい。……会場でもそうだ。炎を反発するこいつを事前にばら撒いて、いざ放つた時にわざと攪乱する動きをさせて被害を拡大させる。あとは放つておけば、崩壊したステージに潰されてヘンリー＝マンゼルを殺害することができる。違うか？」

田の前の少女の表情に、初めて『苦渋』の顔が浮かび上がる。ほぼ仮定でしかなかつたが、彼女の表情を見れば分かる。結城の目論見どおりだ。

「ここまでが確定事実ならば、もう退く必要もない。

「観念しなよ。これで互いに『スマッシュロード』

返答はいく單純だった。

結城の不意を突くように、再び繰り出される猛スピードの上段蹴り。しかし一度同じ手でしぐるほど、諏訪部結城は単純な男ではない。

今度こそ確実に防御を構え、空く左手でガシッと迫り来る蹴りの足首を掴み取つた。

「！」

片手を押さえられ、片足を掴まれ、バランスと重心が不安定になる少女が抵抗の声を放つ。同時に未だ自由な、先ほど炎を切り離した右手で拳を振るつてくるが、それは結城の頬に当たつてもパシン、という生ぬるい音しか生み出さなかつた。

それを見て、結城は笑う。

今度こそ勝利の笑みだ。

「 重心を失つて体の半分すらまともに動かせない状況じゃ、まともなパンチ力は出ないよ」

あとはもう、返答すら待たなかつた。  
少女に反して自由に動かせる脚を大きく振りかぶり、残る片足を一気に刈り取る。

完全に両手両足を使えない少女は、受け身を取ることもできず、この後頭部から地面に叩きつけられた。

「 ああ、うん。わかつた。じゃあおいおい連絡するよ

言つて、結城は端末の通話を切つた。

黒髪少女との戦闘から数分。未だ灰ビルにいる結城は壁に寄りかかつて綾羽に事の顛末を報告したところであつた。

と言つても、少女の行つた手品かと思つよつな炎の出現や、ただの女の子とは思えない恐ろしい身体能力などその他諸々については

省いたが。とりあえず追つていた一人組の片割れを捕まえた、程度の報告である。

ちなみにコンサーント会場内の避難はとっくのとうに終わっていたらしい。幸いにも死者はゼロ。軽い火傷や掠り傷が数名いる程度で済んだらしい。何とか無事に一件落着、といったところか。

ただ一つ不安があるとすればヘンリーの下へ戻つていった黒コートの男だが、非難活動も全部終わって、今は義弘さんがヘンリーに着いてやつているらしい。一応あれでも結城より先輩なのだ、おそらく心配は要らないだろう。

「さて……」

通信端末をポケットに入れ直し、チラツと結城は傍らへ視線を向ける。

そこには綺麗な黒髪をだらしなく散らせて、今や気絶している例の少女。

最後の一撃、受け身すら取れずまともに後頭部を地面にぶつけた彼女は、そのまま眠るようにして氣を失つてしまつた。もしかするとあとで晴れてくるかもしけないが……いやなに、女の子の顔面を全力でぶん殴るよりかマシだろう。勘弁してくれ。

ちなみにこの少女、これからどうなるのかというと。

數十分経てばここに来るであろう手はずになつている綾羽とその他サポートメンバーに引き渡して、そこから身元の調査。大体の証拠が出揃つたらあとは警察へ送還する手順だ。

多少結城の良心が傷つぐが、仕事なのだから仕方ない。大人しく迎えを待つてはいるしかできないだろう。

(しかし、事情聴取でちゃんと口を開いてくれるかね。過去に何件か、捕まえたにも関わらず徹底的な証拠が掴めなくて警察まで行き届かなかつたこともあるからなあ)

そう、問題はそこなのだ。

『ジョーシータ』のガードはあくまで秘密裏の存在。結城やその他ガードがどう言い張つたって、それが第三者の意見に成り代わることは決してない。あくまで『ジョーシータ』は調べる側であり、サポートメンバーがそれらを突きつけて初めて警察送りにすることができる。なんたつて逮捕状も何もなく犯人を捕まえたわけなのだから、証拠も何も無しに『コイツ逮捕して』と言つても突き返されるだけなのだ。

まあ、ガードの護衛対象が基本的に有名人であることから、捕まる現場や犯行現場を多くの一般人や、場合によつては警察そのものに見られているというパターンがほとんどなのであまり心配することでもないのだが。

(……って、待てよ。考えれば考へるほど心配になつてきたぞ。このままじゃコイツ、捕まえても何の証拠も見つからずに終わつてしまふんじやないか？)

思わず疑念の思いを込めて気絶する少女に視線を送る。

そもそも、よく考へればコンサート会場を襲つたあの炎をこの少女が放つたという証拠がどこにあるだろ？か。臨海公園内の監視カメラに映る映像は、あくまで彼女とコートの男が走つて逃げ出すところをおさえたものである。ぶっちゃけ、あの超常現象をこの小柄な少女が放つたといつて誰が信じる？ 相対した結城でさえ未だ現実感がつかめずに入りのうに。

先ほども言つたが、ガードの言葉 　　今の場合結城の言葉は証拠として提示することは不可能である。というかこの事實を突きつけても、取調べのときだけ少女が否定しだしたら結城の虚言として終わる可能性が大だ。そもそも何もないところから炎を出すという行為自体非現実的だというのに。

“どういの言葉が信じられるか。そんなもの一目瞭然である。

(あれ？ 今更だけ本氣で駄目じゃね？ デリさんの方の子)

気絶させてなんだが、目の前の少女をどうするべきか本氣で悩み始める結城。

まず捕まえるのは無理な気がしてきた。サポートメンバーに引き渡しても、すぐに無実だと思われて釈放。あんな女の子に対して暴力振るつたのかと『ジェシータ』内であらぬ噂が流れてしまい、挙句の果てには大量の始末書。あれ、やばくね？

結城の背中に冷や汗が流れ始める。まずいまざいまざい！ 正しいことしたはずなのになんで危機に陥ってるの俺！ と真面目に頭を抱え込んでしまう。

しかし、だからといって今ここで逃がすのもどうかと思う。事実この少女が犯行を行ったのは事実な訳だし、ヘンリーの始末だとかなんとか確かに口にしていた。ここで逃がしてはまたも別の機会にヘンリーの命を狙ってきてきそうで、明らかな危険因子を放置しておけるほど結城も寛大な心ではない。

けれどもそれは取調べが終わり、釈放されてからも同じだ。また共に行動していた男と合流して犯行に及ぶ可能性はいくらでもある。つまり何が言いたいのかといふと、

(詰んだ)

割と本気で。

諏訪部結城、ガードになつてからここまで追い詰められた状況も久しぶりである。いやのんきに構えてる暇などないのだけれども。

(綾羽に相談してみるか……？ いや無理だろ、綾羽だって『ジェシータ』の一員な訳だし。何とかしてこの子にヘンリーさんを殺害

しょひとする意思をなくしてもうえれば良いんだけどなあ（

田が覚めたら説得でもしてみるか、と気休め程度の考えが浮かぶが、どうするにしても時間と場所が必要である。今すぐここでいう訳にもいかない。

何するかも分からぬこんな危険な奴を結城としては野放しにしておくことができないのも事実。

（……うーん……）

そこでふと、名案が思いついた。

何とか彼女を説得するため、時間が必要。『ジエシータ』へ身柄を引き取らせるわけにはいかない。すぐに釈放されてしまつからどう考へても危険。手元に置いておくのが現段階の最善策。ならば、話は簡単ではないか。

（よ、よし。やつぱり俺天才じゃないか。見てろよオイ）

とりあえず結城は再び通信端末を取り出ると、綾羽へ向けてコールする。

数秒して相手はすぐに出た。

『なに？ 結城』

聞きなれた幼馴染みの声を切つて、結城は言つべき事柄だけを頭の中で纏める。深く詮索されでは面倒だ、早口に結城は答えた。

「綾羽、悪いけど犯人の身柄取引はいいよ。引き返してくれ」

『え？ ……ちょ、ちょっと待つて。いきなりどうしたの？』

「悪い、ちょっと油断して逃げられちまつたんだ。俺は追つか  
じやあまた後でー！」

『ちよ、結城？ 待つてつて』

ブチッ、と無理矢理回線をたたつ切る。なんだか綾羽に対してもこんな扱いな気がするが、まあ気にしないで置く。

それよりも傍らの少女だ。綾羽のことだからああ言われてもこの場所まで様子を見に来る程度のことはするはずだ。結城は迅速に行動を開始すると、倒れる少女を軽々と背負つ。さつさとここから離れなければ。

「んじゃ行くか。……どうか走つてるとおり田原まで背中からの刺殺工ンドだけはやめてくれ」

想像以上に軽い少女を背負つたまま、結城はその場から走り出す。諏訪部結城人生初、女の子を部屋へ連れ込みます。

「……いや、分かつてた。こうなることあよおく分かつてた。でも他に方法がなかつたんだから仕方ないつしょ？ ねえ？」

誰に言つわけでもなく、結城は自室で悶々と頭を抱えていた。

現在地は東京新宿の隅っこにある小さな学生寮。その一室。

『ジエシータ』だの何だの言つても、所詮結城は17歳の少年でしかない。未だ義務教育の期間を抜けていないため、結城自身、とある小さな高校に在籍している身である。私生活の住環境も『ジエシータ』職員の部屋ではなく、こうして学生寮の一室を取り奨学金と仕事の報酬で生活を営んでいる。休日はここから仕事へ向かい、平日は学校へ。それが基本的な結城の私生活だ。

……だが今までの短い人生、一度も異性を部屋に入れたことがない純情少年がここに一人。

チラリ、と自分のベットに寝かせている黒髪少女に視線を向けた。まさか始めて招き入れる女性が名前も知らぬ謎少女だとは誰が思つただろうが。少なくとも俺はもつと別のパターンを望んでいたぜ、と内心で言い訳がましく述べてみる。

(……そういうや綾羽すら入れたことないんだよな)

互いに幼馴染みとか言つてはいるが、あまりプライベートには関わったことがない気がする、と結城はしみじみと思い出す。綾羽と

その父親である義弘は、昔母親をなくしてからというもの家がないため現在は『ジエシータ』内の職員寮に住んでいるのだが、結城がそちらへ招かれることがあっても、結城が招いたことは一度もない。やはり男としての貴重な体験を、見知らぬ女で使い果たしてしまったということだ。

「ち、ちくしょう。意外と可愛い顔して眠りやがって……」

細々とした事情で仕方なく、いやそれはもう仕方なく、本人の意思関係なく不可抗力で自室に連れてきてしまったこの少女。見れば見るほど結城のどこか目覚めてはいけない感情が刺激されているようだった。

幼さの残る綺麗な顔立ち、白い肌、桜色の唇に、その奥から漏れる定期的な吐息。そのままでもシャンプーのコマーシャルに出れそうな美しい黒髪が乱雑にベットの上に広がっており、少女のあまりにも無防備な体勢は何というか」ひ……、

「つて、駄目だ！ 今ナニを考えた諏訪部結城！ ナニだけにナニつてか！ あつ、今俺上手いこと言った？ ……じゃねえよ！！」

うがーっ！！ と割と広めの部屋で謎の雄たけびを放つ結城。ここへ彼女を連れ込んだのは完全にどう考へても結城の自業自得なのだが、どうしても叫ばずには入られなかつた。

……そうだ、そもそもは仕事の都合上最善の行動を選んでここに連れ込んだわけじゃないか。別に疚しい気持ちなんて欠片も持ち合わせていないし、明らかに危険な少女を野放しにしておくよりかはマシだろう？ そうだろう？ と半ば自分に言い聞かせるようにして結城はブツブツ呟いてみる。何かもう半ばヤケクソだった。

とにかく状況を整理しなければ。

いつまでも少女の寝顔なんざ眺めていても埒が明かない。とりあ

えずこれから先どうするか、眞面目に考えてみなければ。

(……やっぱ田先の問題は、この子をどうするか、だよな)

理由は分からぬがヘンリー＝マンゼルの命を狙つてゐるであろう少女。このまま『ジエシータ』のサポートメンバーに預けては何の意味もないと判断しこつして連れ帰ってきたわけだが、だからといつてそこから先のことには結城自身名案があるわけではない。

とりあえず結城の田の届くところに置いておけば彼女が再びヘンリー殺害のために動き出すことを防げるだけで、根本的な解決にはなっていないので。

(どうも今回の案件、無駄にきな臭いんだよな……。この子や一緒にいた男の正体といい、何か裏がありそうな気がする)

結城にとって一番ありがたいのは、田を覚ました少女に何とか説得を試みて、ヘンリー殺害の気をなくさせること。そうすれば彼女を捕まえることはできなくとも、ヘンリーに危害が加わることもなく一件を終えることが出来る。

だが……先ほどのビル解体工事現場。問答無用で、確實に結城を殺すつもりで襲い掛かってきたこの少女が、『ヘンリー殺すのやめれ』といったところで素直に承諾するとは思えない。どっちにしろ彼女の事情を聞いて、それを踏まえた上で対話しなければならないのだ。

ああ、めんぢくわ……、といわからの事に悩まされる結城であった。

(俺……絶対早くに禿げそつ……)

実際にありえそだから困る。つてか怖い。

ストレスと頭皮の問題については考えるのが怖かったので、すぐさま思考をシャットアウトした。

と、そんな時。

「……、ん」

背後で、もぞつ、と動く気配。

振り返って見れば、ようやくお姫様のお目覚めのようだ。閉じられた瞼が僅かだが震え、しばらくしてゆっくりと持ち上げられる。中から黒い瞳が覗き、呆然と視線を漂わせていく。緊張の面持ちだった結城も、そこで我に帰る。さすがに黙つていては駄目だろ?と思いつつ、ワタワタしながらも必死に次の言葉を考えて、

「……お、おはようございます?」

テンパつた末の謎挨拶。

傍らからかけられた結城の声に、少女は僅かに反応し目線が動く。その視線が確実に結城を捉え、なんともいえない雰囲気に結城はとりあえず苦笑いを浮かべてみる。

寝ぼけているのか、その後少女は首だけ持ち上がらせるとフルフルと回りに視線を送り、改めてこちらに対しても視線を固定すると、何かを思い出そうとするかのように眉をひそめた。

「え、えっと……」

「……」

「あー……」

「……」

「……」

「……」

じぱりくして、じわじわと過去の回想を思い出したのだろう。寝ぼけ眼な少女の目が段々と見張られていぐ。たぶん記憶と現実を照らし合わせているのだろう。俺はそんな少女に気まずい視線を返すことしか出来ず、気づいたときに勝手に口が開いてしまっていた。

「か、体大丈夫？」

それが開戦の合図となつた。

先ほどまで可愛らしい寝顔を浮かべていたとは思えないような鬼の形相に少女顔面が移り変わり、とんでもスピードでその拳が飛来してきた。

受け止めたのは奇跡だと思つ。

「あやああー？ い、こきなり攻撃かよ！ 怖っ！ やつぱこの子怖いー！」

「あ、ああ、あなた！ さつきの変な男！ な、なんで！？ いじはどー！？ 私はどうしたのー！？」

「」答える！ ちやんと答えるからー。だからやめー。とつあとず手を引っ込めろー。」

冷や汗全開でとにかく叫ぶ。田の前でつばぜり合になつてている

少女は寝起きで完全にパニックに陥っているようだ。

……と、思つたら実際そうでもなかつたらしい。結城の言葉にハツと我に変えると、意外と大人しく手を引いてベットの上にボフン、と座り込んだ。意外と落ち着きのある性格なのだろうか。

目の前にいる自分を気絶させた男よりも、自分の状況を把握することが最優先と考えたらしい。

「はあ……、はあ……私は一体……」

表情いっぽいに困惑の色を浮かべて、女の子座りの体勢のまま小さく俯く少女。

さて、どこから話したものか……自分で連れてきておいてなんだが、まだ彼女とどういう接し方をすればいいのかまったく考えが及ばない。そもそも互いに敵対し、向こうからしてみれば殺しあった仲なのだ。そう馴れ馴れしくできる訳がない。

しかし状況は急を要している。結城は必死に言つべきことを考え、口を開いた。

「……落ち着いて聞いてほしい。今君は、俺に捕らえられている状況だ」

僅かに少女の顔が持ち上がり、こちらの顔を見つめてくる。その視線には少しばかりの敵意と警戒心が見え隠れしていた。

「覚えていると思うけど、あの後気絶した君を背負つてとりあえず俺の部屋に運び込んだ。このまま警察に引き渡すのは忍びないと思つてね、その前に俺の方から話だけでも聞いつと思つて」

「……」

少女の無言の視線が突き刺さる。それでも結城はできるだけ余裕の表情を保つて、それに応える。

「……それで、話すことなんてあるの？」

紡がれた冷たい言葉は、おそらく彼女なりの白旗なのだろうか。さつきのように突然襲い掛かってくる気配もないし、今のところ安全様子。

しかし向こうが会話する気があるだけでも十分である。まずどこから聞いたものかと頭を悩ませた結城は、とりあえずもっとも気になっていることを率直に尋ねてみた。

「あのや……いきなりで悪いんだけど、君が使つてたあの炎、一体何なの？」

炎というより、正確には彼女が見せてきた超常現象の数々だ。手に灯される炎から、爆発的な火力を持つ炎弾、信じられない身体能力の数々。それらの現象が今最も結城の中で引っかかっている事柄である。なんらかの手品か、必ずトリックが隠されているとは思えるのだが……なぜだがまとわりつく霧のようにその事だけが結城の中で引っかかっていた。

しかし、

「……あ……ああ……っ！」

少女からは返答が返つてくる」となく、なぜか突然ワナワナと震え始める。どういたおい。

まるでこの世の絶望でも見たような顔でガタガタ戦慄する少女は、まるで呪文のように何かを呴き始める。

「そ、そうだ……わ、わわ、私、魔術を見られて……しかも、い、一般人に負けて……！」

「お、おこ。こきなりどつした」

何を言つているのかいまいちよく分からぬが、初めてホラー映画を観た小学生の女の子みたいな齢えた様子でいられるとするがの結城も心配してしまひ。

とにかく今は安心をねらうと少女の肩に手を伸ばし

「お、お願い。やつぱり死んで……！」

殴られた。

「つばあああ！……お前をつけから何なんだよー。ひとある、りん拳振り上げやがって！ 捨したわ！ 一瞬でもお前のこと心配して損したわ！」

「うるさいー 死ね！ 見られたからには死んでもうわなきや困るのよー」

「なんだよそれ！ お前はアレですか、秘密知られてパンパンに怒つちやう悪の組織的なアレですか！ 一ひとう平和的解決を進めてんのに傷害罪いくない！」

「そんなこと！ 関係！ ないのよーー とにかくあなたには死んでもうわなきや、黙田ー なのーー」

「い、いたー？ や、やめ、いだつー？ ノのやん、やめろコトー！ 顎狙うのはダメ！ ほんとダメ！ 卑怯だぞ！ つつか本氣でや

めうおんぢりや あああああーー！」

ちくしょ「もう我慢ならねえーー」と拳を猛連打する少女に相対して、結城も立ち上がり真正面から取つ組み合ひ。

一人用のベットの上で、歳の近い男と女が互いの手を掴み合つて睨みあう謎の光景。かなり間抜けな構図なのだが、結城はそんなこと気にも留めない。といつかそもそも結城と目の前の少女は敵対する間柄であり、こうなることはいく当たり前のことなのだ。

「そもそもテメエなんでいきなりキレんだよー いちいち言動が荒っぽいんだよこの暴力女！」

「死ね！ 話す義理なんてないわよー とにかく死ねー！」

「一いつ瞬間に死ねだなお前！ ああもういいー じつはたら無理矢理にでも手ごめにしてやるッー！」

と、その時。

ベットの上という不安定な足場が災いした。互いに割りと本氣の力を込めていたため、ぐしゃぐしゃに歪んでいたベットのシーツがついに耐え切れなくなり二人の足場を滑らせたのだ。

突然のことに対応することが出来ず、少女は後ろへ、結城は飛び込むようにして前へと転倒する。

「のうわあー？」

「さやあー？」

一人してバランスを崩し、結城は少女に覆いかぶさるような形でベットの上へダイブしてしまう。瞬間、まずい、と思つた。このま

ま支えも無しに倒れてしまつては、結城の下敷きになつてしまつ少女が危ない。即座に脳が判断した結城は、慌てて受け身の態勢を取つた。

ぼふん、と間抜けな音が室内に響く。

「いてて……大丈夫か？」

いや、結城がこういう事を言うのも変なのが。

向こうが殺すつもりでも結城からしてみればただの女の子だ。グビルでの戦闘はともかく、あまり痛い思いはしてほしくない。

そのため受け身を取つて衝撃を緩和し、できるだけ少女の体を押しつぶしてしまわないように腕で自分を支えた結城は慌てて尋ねていた。

「……あ、……あ」

しかし、なぜか顔を真っ赤にして啞然としている少女。意味が分からず、とにかく起き上がらなければと両手を動かした結城は、

ふに。  
えつ？

「……」

……なんだろ？、今の無駄にやわらかい触感は。

そう思つて結城は視線を下に向ける。そして驚愕の事実を田の当たりにする。

ほとんど覆いかぶさるような体勢で少女の上にいる結城。そこまではいい。いやよくないけど。でもまだマシだ。しかし問題は受け身に使つていた結城の右手。

反射的に動いていたこの五本指は、生意氣にも、そつ。すぐ真下

にいる少女の控えめな胸の上に鎮座しておつても掴んでおり、

問一。

顔を赤くする少女に覆いかぶさり、あいのひとか胸を掴んでいる体勢は客観的にどう見えるでしょう？

「……あれ？ 講訪部さん、ちょっと今までにないほどの嫌な電波をキャッチしたのですが」

ギチギチと、ギチギチとなんだか嫌な汗を垂らしながら顔を上げる。

田と鼻の先で今までにセクハラ行為を受けている少女は、顔を赤く染め、涙目で、しかし眉は吊り上げて。

「~~~~ツー..」

瞬間、跳ね上がる少女の右脚。

その超スピードの一撃は結城の両足の間につまり股、股間にへと吸い込まれ、

「ギュッ！..」と殺人音。

悲鳴すら叫ぶことが出来ず、講訪部結城は悶絶した。

「どうあえず自己紹介をしよう」

現在、結城と黒髪少女は部屋中央に置かれた小さいガラステーブルを挟んで向かい合っていた。

一悶着あつた末、結城の股間が致死級ダメージを受けたのを犠牲になんとか少女は落ち着きを取り戻してくれた。結城に押し倒されたり、男性の股間を思いつきり蹴り上げてしまつたことに今更ながら恥じらいを覚えているっぽい。いやマジ股間いてえ。

万引きを見つかってふて腐れた女子高生みたいな雰囲気で座り込む少女に、結城は自分から話を切り出した。

「俺は諏訪部結城。すわべ ゆうき君は？」

「……坂井、さかい友那ゆうな」

躊躇いがちに答えられた名は、確かに日本人のものだつた。  
坂井友那。友那、ね。自分と一文字違いの名前にちょっとだけ親近感を覚える。

「ふむ。……じゃあ今から君のことは友那ちゃんと呼ぶ

「いきなり名前？ まあいいけど……それと、ちゃん付けはむず痒いからやめて」

「そうか？ んじゃあ友那で」

結城的には目の前の少女 友那は、結構小柄な体系でなんか幼く見えるためちゃん付けのほうがしつくり来るのだが……まあ本人が嫌がるのだから仕方ないか。

互いの名前についてはこれで打ち切つて、さっそく結城は核心へ踏み込むため口を開いた。

「とにかく話を戻すけど……君の使つてたあの炎や、奇妙な現象の数々は何なんだ?」

友那が明らかに動搖を見せる。

先ほどは聞いた途端問答無用で襲い掛かつってきたのだ。よほど重要な内容なのだろうが……、

「……ぶつちやけ、なんでこんな事隠す必要があるんだ? 何かの手品か、それとも兵器かは知らないけど、そこまで重要なことって程でもないだろ?」

結城の言葉に、しかし友那は気まずそうに首を振った。

「あなたにひとつは軽々しいことかもしれないけど、私にひとつは酷く重要なのよ……。逆に聞くけど、どうしてあなたはこういう事情くわけ?」

ただの興味本位、と率直に答えるわけにはいかないだろう。

そんなクソ適当な言い分じゃ話してくれる訳がないため、仕方ない。結城は正当な理由を脳内で組み立てた。

「確認するけど」 結城はつまらなそうに、「あくまで今の君は俺に捕らえられている状況だよ。もう一度ここで戦つても負ける気はさらさらないが、危険な人質の武器ぐらいは把握しておべきだろ?」

「……、」

明らかに警戒心を露にする友那。それに構うことなく結城は続け

る。

「実力行使はあまり好みじゃないんだ。できれば自主的に話してもうれしいとありがたいんだけど……どうだい？」

真っ直ぐと友那の顔を見つめる。彼女はそれに正面から返してくるが、やはり何らかの躊躇があるので。断固として口を開く様子を見せない。

まあ、実際無理に聞く必要はなかつたりするのだが……ここまで否認されても結城としても気になつてしまつ。

「……はあ、分かったわよ」

と、友那が突然諦めたように溜息を吐いた。  
話してくれる気になつたのだろうか。彼女は衣服を整えつつ一度座りなおすと、改めてこちらに向かってくる。

「本当は教えちゃ駄目なんだけど……あなた、しつこいし。黙つてもまた関わってきそつだし。仕方なくだからね？」

「？ ああ」

言われて、どんな返答がくるものかとワクワクしながら待ち構える。

なんたつてこの少女、手から炎を出していたのだ。一体どんなトラブルがあるのかは不明だが、それが今から明かされるのである。なるほど、弟子入りする見習いマジシャンとはいうこつ気持ちなのだろうか。

「それで、あなたの言う炎とか肉体強化のことだけど……、」

しかし続いて少女の口から飛び出た言葉は、あまりにも予想外すぎた。

少なくとも結城の考えていた答えとは何一つ被らない、突拍子過ぎる解答。

「『魔術』。それが私達の武器よ」

聞いて、頭の中が真っ白になる。

は？ 今この子なんて言った？ 魔術？ 変な聞き間違いでもしたのかな、と適当に結論付けて、改めて結城は聞き返してしまつ。

「……えっと、何だつて？ わりい、ちょっと聞き取れなかつた」

「いや、だから『魔術』だつて」

何言つてんですかこの人。

今度は結城が溜息を吐く番だつた。はああ、と深く息を吐き出す。こういう時、なんて言えばいいんだろう。

「はあ、まじゅつ。魔術ねえ。うん、面白い。面白い[冗談だ。で、本当は？」

「ちよ、端から信じる氣ないでしょ！ 別に[冗談でもなんでもなく本気だつてば！」

元はといえば隠していた癖して、必死に本気だと訴えかけてくる目の前の電波少女。

大体何を言い出すかと期待して待つてみれば……なに、魔術？意味が分からぬ。そんなの誰が聞いたって冗談だと思うだろう。期待して損した気分だ。

「あつ、分かつた。お前本当は手品のトリックを教えたくないだけなんだろ？だから魔術なんて謎名詞で誤魔化したんだな。うん、それなら仕方ない」

「そこはかとなく馬鹿にされてる気がする……」友那はピクピクとこめかみを震えさせると、「本当に冗談でも手品でもなんでもない、本気の本気で魔術なんだつてば！ オカルトって言えばわかる？ 私の言つ魔術はその部類なの！」

「と言われてもねえ……」

正直その言葉をバカ正直に信じるのは無理がある。

「お前の指すオカルトってあれだろ？ 最先端の科学技術に頼らぬい、今でも宗教だの崇拝だの言つてるカルト集団。十字教の信者だけ？」

「まあ……ズレてはいるけどそんなところ」

「別にそいつらを否定する気はないけど」結城は眉をひそめつつ、「でも流石に魔術ってのは無理があるだろ。今の時代、偶像崇拜を未だに信じて神のご加護とやらで病人を治そうとしてる奴がいても、実際それで病気が治る訳がない。お前が言つてるのは、それで本当に病気が治るつて宣言してるようなものじゃないか」

科学科学言つたところで、そういう信仰集団がこの世からなくな

らないのも事実。

多くの技術者や開発に携わる人々によつて新たな商品が作られ、それを結城たち一般人が使って生活を成り立たせるその最中でも、十字教信者つてのは確かにこの世の中にあるものだ。

だが実際にオカルトチックな不思議パワーで何でも出来る、と言わればそれとこれとは別問題。

物事には限度がある。そういうことだ。

「俺は仕事柄、近代科学だのなんだのには身近な存在なんだ。そんな中で『魔術』なんていうオカルトを振り回されてもそう簡単に信じることはできない。普通に考えて当たり前だろ?」

「うう……それはそうだけど……。でも魔術は本当にあるもん……」

頬を膨らませて可愛らしくそっぽを向く友那。

そんなに魔術とやらを否定されたのが気に食わないのか、ふて腐つてしまつたらしい。

「……んじゃあ、そこまで言つなら『魔術』ってやつを分かり易く説明してみろよ。もし納得のいく証明ができるなら信じてやらんこともない」

「……む、それわざと言つてる?..」

「あ? 何がよ?」

「そんなものある訳がないよ」 友那はこれだけは断言するよう、「言つたでしょ? 魔術はオカルト。それを科学的に証明するなんて到底無理よ。神のご加護で人の病気を治すことが不可能……そういう思ひかもしれないけど、ちゃんとした儀式と術式を組めば魔術な

らできないこともない」

んな馬鹿な、と言い返してやりたいところだが、友那のあまりにもハッキリした言い分に言葉をはさむことが出来ない。

「同じ質問を切り返して悪いけど、あなた達の言う科学で今日私が出した炎や飛躍させた身体能力を説明できる？ 私からしてみれば今日使つて見せたあれこそが、『魔術が存在する』っていう証拠なんだけど」

「む。 そういうわれると……」

彼女の自信たっぷりな言葉を鑑みて、おわりに『オカルト方面』での証明ならばできるのだわ。

だがそれを『科学方面』で説明するとなると、確かに不可能に近い。

何もないところから超高熱の炎を出現させ、あらうことかそれをまとう手は火傷をせず、本人の衣服も焼ききれない。にも拘らず敵対していた結城には確かな燃焼効果を有していた。

元より変な呪文を唱えただけでアレだけの炎が出てくると言つ時点では無理があるのに、確かに、証明は無理がある。

(むむむ……)

考えれば考えるほど、少女の見せた奇怪な現象に結城の中で信憑性が出てきてしまい、もしかすると本当に魔術とやらがあるかもしれないと思い込んでしまつ。

(つて、駄目だ駄目だ！ 魔術だぞ魔術。あれだろ？ ゲームとかでMP使つて光線だしたりするあれだろ？ 理屈の前に現実的な常

識の範疇としておかしいだらー。)

結城が言いたいのはそういうことだ。

魔術とやらが証明できないとか、どうのいつのいつ前にまず常識的におかしい。そんなファンタジー要素全快の固有名詞を日々と信じれるわけがないだらー。

だが同時に、目の前の黒髪少女、坂井友那が結城と敵対して数々の謎の現象を起こしたのもまた事実。そればかりはこの目で見てしまったので信じるほかない。

「ふふーん。どう、言い返せないでしょ？ 信じる気になつた？」

確かに返す言葉が見つからず黙り込んでしまつ結城に、友那が目の前でドヤ顔を見せ付けてくる。

「ぐう、む、むかつぐ……ただでさえチビな女に馬鹿にされてるのに、よりより電波女だと尚更……」

「電波……!? ちょっと、馬鹿にしてるのほそつちじやない！」

それとチビ言つなー！」

「あーはーはーい分かった分かった。お前の言いたいことはよく分かつた。信じられんけど、とりあえず君の言つ『魔術』が實際にあると仮定して話を進めよう！」

「や、やつぱり馬鹿にされてる気がする……」

「そのまま田の前の少女と押し問答を続けていても埒が明かない。日が暮れる前にさつさと話を進めなければ。

適当に『魔術』の有無に関する話を打ち切ると、結城は一気にネ

ックとなる部分へ踏み込んだ。

「で？ 僕が聞きたいのは次だ。君たちは一体何者か、でもってなぜヘンリー＝マンゼルの命を狙うのか」

「……質問は一つずつにして

「なら前者が先だ。君は何者だ？ 一緒にいた男は？」

さて、ここからが正念場だ。

なぜ隠していたのかその理由は知れないが、彼女にとつてかなり重要項目であろう『魔術』の存在については（嘘か真かはともかく）正直に話してくれた。これ以上隠し事をする雰囲気はないと思うが、いかに情報を聞き出すか。耳をかっぽじってでも記憶にとどめなけば。

「もう信じてとは言わないけど……」 友那は半ば呆れた様子で、「言い方は色々ある。殺し屋、お手伝いさん、何でも屋、時と場合によつて本当に様々」

「はあ。えっと、つまり？」

「『魔術師』」

軽々と言つてのけた友那の言葉は。

あまりにも堂々と、それこそが当たり前かと宣言するかのようだつた。

「そのままだけどね……魔術を使う者だから、魔術師。ギリシア、ローマ、エジプト、人によつて信じるところは様々だけど、それら

の神話を総合したシンボリズムと形而上学を元に魔術を行使する者。

……それが私達魔術師」

無論、結城にとつてはまったく信じることの出来ない突拍子もない話だが。

今は仕方なくそれがあると仮定して話を進めている。敢えて突っ込みは入れずに、聞き出すべきことだけを探求する。

「なら聞くけどよ。……つまりその魔術師さんとやらが、何らかの理由でヘンリー＝マンゼルを殺しにきたつてことだろ？ それはなんですよ？ 毎日神様にお祈りでもしてそうな連中がどうして人殺しなんか」

「む。それは客観的決め付けだよ。確かに私達魔術師は必ずしもどこかの宗教の教えで魔術を使えるけど、神への崇拜はもともとシスターの役割なんだから」

「あー……まあ、それは何となく分かるけど」

「清教派じゃない、私みたいな一般的な魔術師は基本的に『結社』に身を置いているの。分かる？ 魔術結社」

もちろん言われたところで訳が分からない。

魔術だの魔術師だの、次はそいつらを纏める魔術結社ときたものだ。最早話に着いていくのでやっとである。

「……んで、その魔術結社がヘンリーを殺すのにどう関係してるんだ？ 諏訪部さんはもう頭の中がギチギチなのですが」

「そんなの決まってるよ。依頼よ

オーダー

「は？ 依頼？」

「……そもそも魔術結社って言つのは、多くの魔術師が集まつた一つの派閥……そり、ギルドみたいなもの。運営するのには人手となる魔術師、でもってお金が必要となるわ。そのお金をどうやって稼ぐか……」

「それが依頼だつてのか？」

結城の言葉に友那は小さく頷く。

「簡単に言えば何でも屋みたいなものだと思つてくれてい。頼まれたら、報酬のお金さえ与えられれば、どんなことでも仕事として片付ける。その中には人殺しなんていう汚れ仕事だつてたくさんあるわ」

「……つまり君と、一緒にいたあの男は、『ヘンリー＝マンゼルを殺してくれ』って頼まれたから、わざわざ日本まで来たつてこと?」

「まあ、そんなところ」

話をまとめるとこつだ。

自称魔術師である少女、坂井友那は魔術結社といふに怪しげな宗教団体に所属していて、そこは頼まれたことなら何でもする、いわゆる万屋だ。んで、そこに『ヘンリーを殺せ』という依頼が舞い込んできて今に至ると。

(うは……！れなんてファンタジー……)

無論信じる気はさらさらないが、いつも当然のようにな喋られては無碍に否定するのも忍びなくなつてくる。次々と叩き込まれる固有名詞に、結城は頭を抱え込まずにはいられなかつた。

「もちろん魔術結社なんて表立つて言わずに、『知る人ぞ知る何でも屋』つてのが内の組織の言われだけど……って、どうしたの？ 頭抱えて」

「……いや、なんでもないっす。ちょっと何を信じれば良いのか分からなくなつてきたでござる」「ちよこつとだけ結城は顔を上げる。  
「……それについてもさー。別にその組織を否定するつもりはないんだけど、ちょっと嫌じやないか？ 賴まれただけで人を殺すなんて、普通に考えておかしいだろ」

友那の話が本当だつたとして、今の考えはその組織にとってエゴになるのだろう。もちろん何でも屋とのたまうぐらいなのだから、結城のように誰かを守つたり人助けなどもするのだろう。しかし他人を殺めるというその行為だけは、どうしても認めることが出来なかつた。

「……別に私達だって、仕事を選ばない訳じゃないわ」

しかし、返つて来たのは意外にも同意のサインだった。

「どう考へても理不尽な、正当な理由もない、殺される側に何の非もない、明らかにただの妬み、憎悪だけで頼まれる人殺しはもちらん断るわよ。その中でも一握り……今回の件もそう。ヘンリー＝マンゼル、彼女には殺意を覚えられてもおかしくないほどの非があつたから、私はこうして來たの」

なるほど、と内心頷く。しかし同時に、一つの疑問が浮かび上がった。

(ヘンリーさんが……?)

コンサート開始前、結城は一度ヘンリー＝マンゼル本人と少しの間会話をした。

その時彼女の見せていた姿には、何一つ黒いものが覗くことはなかったはず。それも誰かに殺意を抱かれるほどのあくび一回……あの笑顔の中に、そんなものが隠れているというのか？  
それこそ信じれるわけがない。

「もしかして何も知らないの……？」

目の前の少女が心底驚いた様子でいた。  
悩む結城の姿に、彼の考えていることが分かつたのかもしない。

「何って……何が？」

「……そう、その様子じゃほんとに知らないみたいね。ヘンリー＝マンゼルの悪行」

友那はなぜか、はあー、と溜息を吐いてみせると、

「あなた、どこかのSPか何かなんでしょう？　そういう細かな情報は何も伝えられないわけ？」

「伝えられないつづーか、知る必要がないからな……それで、あの人の悪行ってなんだよ？　何か悪いことでもしていたのか？」

例えば、過去に殺人罪があつて、しかし巧みな情報戦で無罪判決を勝ち取つたとか。

そんな理由があるなら納得はいくが、しかし友那の口から飛び出てきたのは、結城の予想とは遥かに違うものだつた。

「ドラッグ麻薬の売買よ」

聞いて、思わず息が詰まつた。

「麻薬の、売買……？ あのヘンリー＝マンゼルが？」

「売買だけならまだマシよ。取引から、自身での服用まで……依頼内容にはかなりの中毒者つて情報があつた。たぶん彼女に相当近い人物からの依頼なんでしょうね」

結城は思い出す。輝かしい笑顔で話しかけてきて、かなりキヨドつていた結城に親しみこめて接してきたヘンリーの姿を。

あの笑顔の裏には、そんな顔が隠されているといつのか？ 信じる信じないより、信じたくなかつた。

友那がその場しのぎで嘘を吐いている可能性も十分にある。だがそれでは、そもそも彼女がヘンリーを殺しにやつてきた理由がなくなつてしまふのも意味していた。

海外での麻薬の服用はかなりの大罰になるという。

日本ですら薬物犯罪での最高刑は無期懲役。国によつては死刑になることだつてあるとか。そんな中で彼女は麻薬の売買取引に多く関わつて、誰かに殺意を抱かれるほどの裏の顔を持っているというのか？

(……信じがたいな、ほんと)

それはあくまで結城の個人的感情に過ぎないのだが。

「彼女自身も大量の薬物を吸つてるみたいだから、よほど荒れいるらしい。スタッフやマネージャーに冷たく当たつて、唯我独尊を見せ付けられれば……一人ぐらい、本気で彼女のこと殺してやりたいと思うでしょ」

「……、証拠はあるのか？」

「ないわ。だから無理に信じるのは言わないけど」

証拠がなければ信じる必要もない。

だが友那の言動はあまりにもハツキリしすぎていた。結城の觀察眼が物語る。彼女が嘘を吐いていとは思えないと。  
魔術だの何だと、どれも信憑性皆無の話ではあるのだが。  
それだけは、明確としていた。

「……さて、私は質問に全部答えたわよ」

話が一区切りついたのを見計らつてか、友那はふてぶてしく言い放つた。

「それで？ 私はどうすればいいの？ セッキから私、淡々とあなたの隙を窺っているんだけど」

意外とスマートに話が進んだため忘れがちになっていたが、現在目の前の少女は結城にとつて人質の役割なのだ。

どうやら目が覚めてからずつと結城が隙を見せるのを待つていたらしいが、これでも結城は用心深い方である。いつ飛び掛ってきてもいいよう、気を休めることだけはなかつた。

むやみやたらと結城に奇襲をかけてこなかつただけ、やはり戦闘経験は豊富らしい。その辺を鑑みるに魔術師だの何だつてのは頷けるかもしない。半信半疑だが。

「そうだなあ……」

「私としては逃がしてくれるのが一番ありがたいんだけど。せつと仕事を済ませて帰りたいし」

「それは駄目だ。お前放つて置いたらすぐにでもヘンリーさんを殺しに行きそうだし。契約期間を過ぎたからって、確証もない事実で人が無闇に殺されるのを黙つてはみてられない」

「……あつそ」

今度こそ完全にふて腐れた様子でそっぽを向いてしまう友那。

しかしいくら理由を並べても、目の前にいる少女は殺人未遂犯だ。そう易々と野放しにすることは出来ないし、何とかヘンリー殺害を諦めてくれない限り自由にするわけには行かない。

だからといってそのヘンリーにも、確証はないが黒い噂があるらしく、それがある限り彼女が諦めてくれる様子もなさげだ。さうぞうしたものが……、

「……うん、仕方ない。君の身柄は俺が保護する。しばらくは外へ出す訳にはいかないからな」

「……女の子を拉致ひつてこいつの？」

「語弊を招く言い方するんじゃありませんッ！ 護衛のサービス残業だと思えばどうつてことないわ」

友那は田を細めて思いつきりにらみを利かせてくる。が、そうするしか方法がないのだから簡便願いたい結城である。

「とりあえず明日から、俺はヘンリー＝マンゼルの『黒い噂』が眞実かどうかを調べる。そいつがハツキリするまでは危険因子のお前を逃がすわけにはいかない」

「ふん、どうせ本当のことを知つてあの女に呆れるわ」

「もし本当だつたら」 結城は真つ直ぐと友那を見つめて、「その時は、君のことを解放しよう。あとはどう動いたつて構わない。その時またヘンリー＝マンゼルを殺そうとするのなら、俺は私情を抜きにして仕事としてまた君と対立する」

「……あなたが手を引くつて選択はないわけ？」

「それは今日、田の前の男に負けた自分を悔いるんだな」

言つて、ニヒルに笑つてみせる。

主導権を完全に握られていることがよほど悔しいのか、友那の顔はますます不機嫌になつていった。

「あとで後悔してもしらないからね。一度負けた相手には絶対に負けないから」

「おや？ ハセ魔術師さんの強がりですか？」

「むつか……！ だ、誰がハセ魔術師よ！ 本当の魔術師だつて言つてるじゃない！」

「ああ分かつた！ あれかお前、頭ん中が魔術師なんだろ。電波を受信する魔術でも使つてんの？ ふふつ」

「し、死ね！ やっぱりあんた死ね！」

ガシャガシャン！！ と隣の部屋まで届く程度の爆音を響かせながら再び取つ組み合いを始める一人。

諏訪部結城と坂井友那。

この二人の出会いが、全ての始まりとなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8586z/>

---

ジェシータの楯

2011年12月28日20時58分発行